

『流され王』

僕

流され王

柳田

谷底ライオン・男1

人面犬・男2

怪人赤マント・男3

口裂け女・女1

〈第一場〉

そこは廢屋と化した病院。有刺鉄線の前に男が一人。

お話は、ゆつくりと始まる。

作業服の人達がやって来る。ゆつくりと木槌をふるい、病院を壊しはじめる作業服の人達、スローモーションのフィルムのように、ゆつくりと壊れてゆく病院。音は聞こえない。

僕

はてしのない夜は、いつも有刺鉄線の向こう側、あの空き地の方からやってくる。

崩れ去る病院。作業服の人達は、残骸を片付けると来たときと同様ゆつくりと帰ってゆく。残ったのは、白い便器がただ一つ。

僕

夜を歩いているとたまに、ドキッ！とするような空き地に出くわす時がある。油断しちやいけない。いつもの路は知らん顔をして、そっとその身に迷宮を隠しているんだ。夜の曲がり角を曲がる度に此処がどこだか分からなくなる。そうして十三番目の曲がり角を曲がると、突然空き地は目の前に目眩のように現れる。ドキッ！としたらこんどはゾォッ！とする。……風が、吹いてくる。生暖かい風が……。

コンコンコンコンとノックの音

僕

入ってます。……空き地は、都市にあげられた風穴だ。そうしてその穴からは、この世のモノならぬ異界の風が吹いてくる。風は人でなしの風。人でない、夜に棲む化物どもの溜め息だ。臆病者は用心しろ。そら、目を閉じる耳を塞げ。奴らの虜になる前に。気に留めるな、心に留めるな、全てを流せ。さもないと、夜の終わりを信じられなくなる。

コンコンコン

僕

入ってます。……そうさ、行っちゃまえ。気に留めるな。心に留めるな。すべてを流せ。五段活用で流せ。流そう、流します、流す、流す時、流せば、流せ。流れろ、流れろ。みんな流れていっちゃまえ！

便器の中から、トイレトペーパーを頭にのせた男がゆっくりと顔を出す。

コンコンコン。

僕 入ってます。……僕は、ゆくよ。
男 ちよっと待った！

僕 え？

男 せまい日本そんなに急いでどこへ行く。急ぐな、若人よ。

僕 誰だ？

男 人でなしだよ、お若いの。

僕 え？

男 嘘だよな、行きやしないよな、お前は。

僕 余計なお世話だ。ほっといてくれ。

男 そうはいかない。見えてるんだろ？お前には。

僕 何が？

男 見えないのか？ 雑草の間からチラリとのぞいたその白い肌が、街路灯の光をその身に

僕 うけて臙に輝くそれが。

僕 知るかよ、そんなもん。

ドンドンドン。激しくドアをノックする音。僕、行こうとする。

男 僕 見えないのか？ その白い肌に紛うかたなきTOTOのマークが。

僕 え？ ……ゾオツ。

男 ゾオツとしたな。

僕 なんでそんな所にそんなモンが……。

男 僕 見ろよ、この白い便器を。ピカピカ光る白い肌を。とても長い間外の風雨に晒されてい

僕 たとは思えないだろ？

僕 だから何だっというんだ。

男 この便器を外の風雨から守り続けた建物は、何処にいつちまったんだろうな？

僕 なくなっちまったのさ。ずうつと前に。

男 だったらどうしてこの便器は、こんなに白くてピカピカ光るんだ？

僕 夜露のせいさ。夜露は、どんなにくたびれきったものも新しくピカピカにしてみせる。

男 違う。ここにはたしかに何かがあった、つい昨日まで。

僕 何にもないさ。

男 あったんだよ。いや、今でもここにはあるんだ。

僕 男 どっちだっていいさ、そんな事。

ドンドンドン。

男 流す気か？

え？

男 そうやって、気にも留めず心にも留めず全てを流す気だな。

男 しつこいぞ、いい加減にしろ。

男 しかし、そう簡単には流されんぞ。

男 いい加減にしろって言ってるだろ！

僕 ジャー。水洗便所の水音。

僕 え？

男、何事もなかったかのようにそこにいる。

ドンドンドン。

僕 そんな……。

男 言ったろ。そんなに簡単には流れないって。

男 …お前、一体…。

男 流され王。

え？

男 その名は流され王。流され王。流竄されし者の共の王。

……。

僕

ドンドンドン。

王 よいのか？

え？

王 外の御仁、先程より痺れをきらしておるぞ。

僕 貴様！

王 どうするつもりじゃ？

僕 いつもどおりさ。流そう、流します、流す、流すとき、流せば、流せ。五段活用で流せ。

流したら流れる。流れる流れる、みんな流れていっちなまえ！

ドンドンドン、ジャー。音とともに暗転。

男 臭います？
僕 もういいです。ほっとして下さい。
男 自業自得です。
僕 何です、それ？
男 あなたでしょ？その便器を詰まらせたのは。
僕 ……知りませんよ、僕は。僕じゃありません。

僕、行こうとする。

男 何処へ行くんです？話はまだ終わっちゃいない。
僕 帰るんです。帰ってズボンをはきかえないと、臭くつてかなわない。
男 そうはいきません。ちよつとそこまでご足労願いますか？ お聞きしたいことがあります。
僕 何なんだ、あんた？

男 市の下水道課の者です。
僕 市の下水道課？

男 はい。ただいま私も市の下水道課では、市民の皆様を対象に、ちよつとしたアンケート調査を行っております。

僕 よしてくれ。グズグズしてたらズボンから臭いがとれなくなる。

男 そんなにお手間は取らせませんから、ぜひご協力を。

僕 それは、また次の機会ということで。

男 困ったなあ。なるべく手荒な真似はしたくなかったんですがね。

僕 え？

男 しょうがない……。

僕 何を言ってるんです？

男 皆さん、お待たせしました。お仕事です。

男、故障中のトイレをコンコンとノックする。

ドアの向こうから、男1・2・3、女1が登場。僕を0コンマ1秒の早業で椅子に縛りつける。

僕 こんにちは！何するんだ！はなせ！おい、あんた、こりや一体何の真似だ？

男 なーに心配はいりません。ちよつとお話を伺うだけですから。

僕 お話って…。

男達、なにやら怪しげな器械を持ってくる。

男1 柳田さん、準備OKです。

男 その名は柳田 結構。それじゃ先生、よろしくお願いします。

女1 はい。

女1、器械からのびた電極を無造作に僕の体へ取り付けてゆく。

僕　　ちよつと、何する気です？　止めてください。ハハハ、く、くすぐったいじゃ、ハハハハハ。

女1　　どうやら器械の方は問題ないようです。いつでもどうぞ、柳田さん。

僕　　おい、何だこのいかにも怪しげな器械は？

柳田　　ポリグラフ、いわゆるウソ発見器ってやつですよ。

僕　　ウソ発見器だあ？

柳田　　いい加減な答えをされちゃ困りますからね。調査の正確さを期するためです。

僕　　いい加減にしろ！何の調査だか知らないが、こんなことして…。

柳田　　とぼけるな！君でしょう、そのの便所を詰まらせたのは。

僕　　違う！　何べん言ったら…。

ポリグラフの針、嘘と書かれたほうに大きく振れる。

僕　　え？

柳田　　器械は、正直だな。最近、ここいら一帯の公衆便所で同じ手口の悪質なイタズラが続発しているんです。それも君の仕業ですね？

僕　　僕は知らない！

針、再び振れる。

男1　　また針が振れたぞ。

男2　　嘘つきめ！

柳田　　あなたですね？

僕　　…。

柳田　　答えなさい！

僕　　…：…弁護士を呼んでくれ。

柳田　　何？

僕　　弁護士が来るまでは、僕はもう一言だつて口を利かない。

柳田　　余計な知恵ばかり付けて…。

僕　　当然の権利だ。

柳田　　権利だあ？一般人に権利などあるか。権利が認められるのは、我々エリートだけです。

僕　　エリート？

柳田　　そうです。私、自慢じゃないが東大を出てるんです。東大出の役人ですから、もう無敵です。絵に描いた様なエリートです。

僕　　たかが地方公務員じゃないか。

柳田　　職業に貴賤はありません。

僕　　エリートだなんだつて言つといて、よくそんな事が言えるな。

柳田 ……君、こちらの方の口の滑りをよくしてあげてください。

男3 はい。

男3、なにかのスイッチを入れる。

僕 うわあ！ ビリビリビリビリ……、ガクッ。

柳田 喋る気になりましたか？

僕 何だ、今のは？

柳田 気付けの電気ショックです。どうです、目が覚めたでしょう？

僕 貴様！

柳田 君、もう一発お見舞いしてあげなさい。

男3 はい。

僕 ビリビリビリビリ……、ガクッ。

柳田 どうです？ 答える気になりましたか？

僕 ……あんたら一体何が知りたいんだ？

柳田 あなたの道徳心について、ちよつと。

僕 道徳心？

柳田 はい。ほら公衆便所には必ず貼り紙がしてあるでしょう？ 備え付けの紙以外はご使用

にならないで下さいって。あなたはそれを無視して、一体その便所に何を流したんですか？

僕 ……。

柳田 ご存知でしたか？ 私ども下水道課が扱うのは、下水道を流れる汚物だけではないって事。

実は、人の口から口へと流れるウワサ話の類も我々の仕事の管轄なんです。どうです、意外でしょ？ 下水道課がそんな仕事をしたなんて。これは、NHKの「はたらくおじさん」でも放映されなかった事実です。ウワサとうんこ、上と下で出てくる所は違いますが、要は同じです。うんこもウワサも、一言で言えば悲しいくらいの日陰者です。人の生きていく所必ずタレ流されるモノでありながら、何故か目立たぬところ、人の目の触れぬところを選んで、ウワサはまさしく我々の仕事の管轄でしょう？ 我々もまた日陰者です。なにしろ名前からして日陰者です。下水道課。ゲ？ ゲだと？ ゲとは何事だ！ 責任者出てこい！

男1 柳田さん、何もそんなに自分の仕事を卑下しなくても。

柳田 とんでもない。私ほど自分の仕事に誇りを持っている男は、いまだき珍しいんじゃないですか。

男2 歪んでるなあ。

男3 柳田さんの妙なエリート意識は、こうして培われたんだ。

柳田 とところで、最近うちの課におかしな苦情が殺到しております。そこで我々、ある奇妙なウワサを小耳にはさみました。ひよつとして、あなたがそこに流したのもそんなウワサの類ではありませんか？

僕 ウワサ？

柳田 はい。都市伝説とも呼ばれています。我々は、そんな伝説を語ってくれる現代の語り部

を捜し求めていたんです。あなたこそ、我々の捜し求めた語り部かもしれない。

僕 税金ドロボーめ。市民の血税を使ってこんなことまでして、そんなくだらないことをやっているのか。

柳田 くだらない？ とんでもない。私には野望がある。いつか伝説を逆に辿り、この国の地下、下水道よりもっと深い所を流れるドロドロとした何かの正体を見てやろうと思ってるのです。

僕 そんなことして何になるんだ？

柳田 いいですか、この国を動かしてきたのは陛下でも政治家でもない。我々役人なんです、それもとびきり優秀なね。

僕 馬鹿馬鹿しい。

柳田 まあそう言わずに、聞かせて下さい。あなたが便所に流した、備え付けの紙以外の伝説を。

僕 話すことなんてないです。僕は、お捜しの現代のナントカなんて者じゃない。

柳田 でも何かあるでしょう？

僕 ないって言ったらないです。

柳田 あなた、自分の立場わかってます？

僕 え？

柳田 君、もう一回こちらの方の口の滑りをよくしてあげて下さい。

男3 はい。

僕 え？あ！そ、そういえば昔どこかでそんな話を聞いた覚えがあるようなないような……。

柳田 あるんですね？

僕 えーと、あれは確か……。

柳田 聞かせて下さい。

僕 つみきみほのお母さんはおサルさん。

全員 え？

僕 つみきみほのお母さんは、実はおサルさんらしいです。

男1 う、嘘だあ！

男2 デタラメ言うな！

男3 識でものを考えろ！猿から人間が産まれるわけないだろ。

柳田 ちよつと待った。君達は何か勘違いしている。伝説は伝説です。嘘でもデタラメでも、ましてや常識でもない。

男1 は？

柳田 ポリグラフに注目。

男2 あ。

男3 針が動いてない。

ポリグラフの針、嘘と本当の中間で微動だにしていない。

柳田 その通り。

男1 本当なんですか、今の話。

柳田 いえいえ。

男2 嘘なんでしょう、やっぱり。

柳田 とんでもない。

男3 一体どっちなんですか？

柳田 どっちでもありません。伝説とはそういうものです。それは嘘と本当のギリギリの境界線、現代に残された唯一の闇を飛び回るコウモリです。嘘かと思えば本当、本当かと思えば嘘。フィクションでもノンフィクションでもない奇跡の物語なんです。先生。

女1 はい。

柳田 記録の準備を。

女1 もう出来てます、いつでもどうぞ。

柳田 結構。さあ、ウワサの続きを聞かせて下さい。

僕 マクドナルドのハンバーガーには、猫の向が使われているらしいです。

全員 おお！

柳田 続けて。

僕 「ドラえもん」のお話は、実は、交通事故で植物人間になっているのび太くんの見ている夢で、のび太くんのモデルは実在するそうです。

全員 何と！

柳田 それから。

僕 ……。

以下は、皆の知ってるウワサで間に合わせてください。

僕 ……。

全員 えー！

柳田 素晴らしい。君こそ我々の捜し求めていた現代の語り部に間違いない。ですが、どれもこれも少々小粒ですな。その程度をつまらないウワサで、TOTOの水洗便所が詰まっちゃったとはとても思えない。さあ、そろそろ語ってくれませんか？あなたが便所に流した備え付けの紙以外の伝説を。

僕 僕の知ってるウワサ話は、これで全部です。

ポリグラフの針、嘘のほうに大きく振れる。

男1 針が振れたぞ。

男2 嘘だ。

男3 柳田さん、こいつ嘘をついています。

僕 ちがう、嘘じゃない。

針、再び振れる。

男1 やっぱり嘘だ。

僕 嘘じゃない。本当に知らないんだ。

これよりポリグラフの針は、嘘のほうに振れっぱなし。

男2 嘘つきめ。

僕 嘘じゃない！

柳田 いいや、君は知ってるはずだ。流され王の伝説を。

僕 え？

柳田 君がそこに流したのは、ズバリ、流され王の伝説ですね。

僕 …知らない。

男3 嘘だ。

柳田 ねえ、聞かせてくださいよ。私達だけにこっそり、流され王の伝説を。何と言われても、知らないものはしょうがない。

柳田 そうですか、残念です。おい。

僕 ちよつと、何する気ですか。

柳田 言ってもわからない人には、痛い目をみてもらいます。

僕 痛い目って、まさか…。

柳田 今度のは先刻のより少々電圧を上げますので、ひよつとしたら…。

僕 ひよつとしたら何だ？ハッキリ言えよ。

柳田 おい。

男3 はい。

僕 ちよつと待った。

柳田 話す気になりましたか？…。

僕 話すも何も、知らないものは喋れないだろ？

柳田 残念です。

僕 ちよつと…。

柳田 やれ。

女1 柳田さん！

柳田 ん？

男3、スイッチを入れる。

全員 ビリビリビリ…。…。

柳田 な、な、何事だ！

女1 み、水です。水を伝わって電流が。

柳田 あ？

女1 便器から溢れた水が、いつの間にか私達の足元まで。

柳田 ば、バカ者！誰か早くスイッチを…。

火を吹くポリグラフ。

全員 うわあ！

砕け散る電球。真っ暗になる。

男1 しまった！奴が逃げた。

柳田 何！追うんだ。現代の語り部を逃がすな！

男2 追えと言われましても…。

男3 ダメです。真っ暗でも見えません。

柳田 臭いを追うんだ。奴のズボンの裾にはうんこがついている。うんこの臭いを追え！

男1 ……いたぞ！そっちだ。

男2 しまった。そっちへ行っただぞ！

男3 野郎！

ボタン。ドアの閉まる音。

男1 畜生！

カチッ。錠の閉まる音。

男2 奴め、中から鍵をかけやがった。

ドンドンドン。口々に「開ける」とか「出てこい」とか言いながらドアを叩く男達。

男3 トイレに立て籠もるなんて、子供みたいな奴だな。

柳田 まさしく子供です。

男1 子供？

男2 相手は子供なのか？

男3 え？子供なんだ。

男1 子供なんだな？

男2 子供かな？

男3 子供だったっけ？

男1 子供か？

男2 たぶん。

男3 子供に違いない

男1・2・3 そうだったのか。でも、いつの間に……。

男1 あんたが最初に子供だって言ったんだろ？

男3 知らないよ。俺はそんなこと一言も言ってないぞ。

男2 誰だ？暗闇で顔が見えないことをいいことに、とんでもないデマを流してるのは？

柳田 面白いですね。

男1・2・3 柳田さん？

柳田 つまりウワサとは、暗闇の伝言ゲームです。無邪気なゲームを経て、口からでまかせのデマは、よりもつともらしいウワサへと変化する。いや面白い、まったくもって面白い。

男1・2・3 柳田さん。

柳田 何をしてるんです。これこそ我々下水道課の仕事です。その流れを見失わないように。さあ、ウワサの流れに乗って奴を追いましょう。

男1 どうする？

男2 子供相手じゃなあ。

男3 でも、仕事は仕事だ。

男1 子供相手に本気出すなんて大人気ないぞ。

男2 うーん。

男3 だったらどうするんだよ。

男2 うーん。

男3 唸ってないで、あんたも何か言えよ。

柳田 うーん。だったら俺達も子供になればいいんじゃないのか。

男3 え？

男1 なるほど。子供対子供なら公平だな。

男3 子供に？

男1 子供か。

男2 子供ね。

男3 なれるのか？

男1 なれるもんか。

男2 なれそうもない。

柳田 なせば、

男3 なる。

男1 なれるかも。

男2 なれたりして。

男3 なれるものなら。

男1 なれるんじゃない？

男2 なれる。

男1・2・3 よし、子供になって奴を追うぞ。……なれる訳ねえだろう！誰だ？そんないい

加減なこと言い出したのは。

柳田 皆さん、深く考えてはいけません。ウワサとは、そういうものです。嘘でも本当でもない奇跡の物語を、今は信じようではありませんか。

男1・2・3 無茶苦茶だ！

柳田 ドアをこじ開ける！

ドンドンドン。口々に「何やってんだよ」とか「開けるよ」とか言いながらドアを叩く男たち。

僕　　いい加減にしてよ！お願いだから、僕のこととはもうほっといてくれ。

ドンドンドン。

僕　　お願いだから…流れろ、流れろ。みんな流れていつちまえ！

男3 ニッキバリヤー。
僕 何だよ、ニッキバリヤーって。

男1 知らないのか、遅れてるな。

男2 この田舎者。

僕 僕は田舎者なんかじゃない。

男3 黙れ、田舎者。

僕 それ、だいたい日本語か？ そんな言葉、僕知らないぞ。

男1 バカ、日本語に決まってるだろ。ニッキバリヤー。

男2 ニッキバリヤー。

男3 ニッキバリヤー。

僕 わあー！僕の知らない言葉を、僕の前で使うな！

男1 ウッシッシ、この言葉を使うとな、お前の汚いバイキンは絶対俺達にうつらないのだ。
どうだ、恐れ入ったか。ニッキバリヤー。

男2 ニッキバリヤー。

男3 ニッキバリヤー。

僕 なんだ、ニッキバリヤーってえんがちよの事か。

男2 お前、まだえんがちよなんて使ってるのかよ。今はな、ニッキバリヤーなんだよ。ニッキバリヤーの方が、えんがちよよりもパワーが強いんだよ。わかったか、田舎者。

男3 お前、うんこマンのうえに田舎マンだな。恥ずかしい奴。

僕 何だよ、その田舎マンって。

男3 田舎者の男だから田舎マンだ。何か文句あつか？

うんこマン、田舎マンの大合唱。

僕 やめろ！僕は確かにうんこをしたかもしれないけど、それは誰でもする事であって…、お前らだって学校ではしないかもしれないけど、家では絶対やってる筈だし…。だから僕は、ちっとも恥ずかしくなんかないぞ。だけど、僕は田舎者じゃない。田舎者は取り消せ。田舎者なんかじゃない。

男3 田舎マン。

僕 取り消せ。

男2 田舎マン。

僕 取り消せ！大体ニッキバリヤーのニッキって何だ？少年隊の錦織くんの事か？何だよ、説明してみろよ、出来ないのか？責任者出てこい！

男1 じゃあ証拠はあるのかよ、証拠は。

僕 証拠？

男1 お前が田舎マンじゃないって証拠、見せてみろよ。

男2 そうだ、証拠だ。俺たち小学生はな、なによりも証拠を重んじる。まことに法治国家に相応しい住人なんだ。

男3 ないだろ。お前は田舎マンだからな。

僕 あるよ、ある。

男1 じゃあ言ってみろよ。

僕 聞いて驚くな。僕が前に住んでた町にはな、何と水洗便所があったんだ！どうだ、スゴイだろ。この町に水洗便所なんかあるか？ないだろう。ある訳ないよな。なぜなら、お前からこそ田舎マンだからだ。ざまあミソ漬け、お尻ペンペンだ。

男2 嘘つけ。

僕 嘘じゃない。本当にあったんだ。

男3 いいか、水洗便所ってのはな、本当の都会に行かないやないんだ。お前ごときが住んでた町に、そんな物ある訳ないだろう。

僕 あったよ。町内でたった一つだけ、町の外れの脳病院に水洗便所があったんだ。

男1 じゃあ水洗便所がどういう形をしてるか言ってみろよ。

僕 それは……。

男2 ホレ見ろ。やっぱりお前は嘘つきだ。

男3 嘘つき、嘘つき、嘘つきマーン。今日からこいつのこと、うんこマン、そのうえ田舎マン、そのまたうえに嘘つきマンと呼ぼうぜ。うんこマン、そのうえ田舎マン、そのまたうえにつきマーシ。恥ずかしい奴。

僕 何だよ、その嘘つきマンで。

男3 嘘をついた男だから嘘つきマンだよ。何か文句あつか。

うんこマン、田舎マン、嘘つきマンの大合唱。

僕 やめろ！僕は嘘なんかつかない。僕は見たことはないけど、確かにあったんだ。本当さ。だって、父さんがそう言ったんだから。確かにあるって言ったんだから。父さんの言うことに間違いはないんだ。

男1 うんこマン、そのうえ田舎マン、そのまたうえに嘘つきマンの親父の言った事なんて信用できつか。

僕 父さんの悪口言うな。取り消せ。

男1 いやだね。

僕 取り消せ。

男1 嘘つきマンの親父は、やっぱり嘘つき。

僕 この野郎！

僕、男1に飛び掛る。大乱闘。そこへ、女1登場。

女1 ちょっとあんた達、そこで何やってんの？

男2 あ、委員長だ。

男3 うるせえな。女子はすつ込んでろよ。

女1 何よ。そうはいきませんからね。あんた達、また掃除サボってたでしょう。帰りの会で先生に言いつけるわよ。

男2 うるせえな。来るなって言ってるんだろ。

男3 あっち行っちゃえよ。

女1 (僕と男1に気付く) : あんた達、何やってんの。ちよっと、やめなさい。やめなさいよ！

男2 おっと、そうはいかない。

男3 これは男同士の問題だ。関係のない女子が、口を出すんじゃない。

女1 バカなこと言ってるんで、二人を止めて。

男2 嫌だね。

男3 勝手にやらしとけばいいんだよ。

女1 そうはいかないわ。何があったか知らないけど、ケンカなんて、この学級委員長の私が許しません。

男3 だったら自分で止めるよ。

男2 そうだ、そうだ。

女1 いいわ。そうさせて頂きます。

女1、男子便所に入ってこようとする。

男3 チョイ待ち。

女1 何よ、まだ何かあんの？

男3 おまえ、女子のくせに男子トイレに入ろうとするだなんて、とんでもない奴だな。

女1 え？

男3 エッチ女め。そんなに男子トイレが覗きたいのか。

女1 ち、違うわよ。私はね……。

男2 皆さん、聞いてください。私達のクラスの学級委員長はですねー、とんでもないエッチ女なんですよー。男子便所にズカズカ入ってきて、私達が小便していると色々覗くんですよー。

女1 違うって言うてるでしょう。

男2 どう？それでも二人を止める？

女1 卑怯よ、あんた達。

男3 何とも言え。但し委員長、こっちへ一歩でも踏み出したが最後、あんたは自動的にエッチ女、エロ女、おまけに下助平女になることをお忘れなく。

男2 そしてそうになったら最後、最低小学校を卒業するまで、下手をしたら中学生になってもエッチ女、エロ女、ド助平女のままだということもお忘れなく。

男3 さあ、どうする？

女1 (ひるむ女1) く……。

男2・3 どうする、どうする？

女1 ……あ、先生。

男2・3 え？

女1 先生、大変です。男子が掃除をサボって、便所でケンカしてるんです。早く、早く来て二人を止めてください。

男3 ちえ、あぶなくなると思う女子は先生を呼ぶんだから。

男2 くそー、卑怯だぞ。

女1 自分たちのこと棚に上げて、よくそんなこと言えるわね。先生、早く早く。
男2 ヤバイぞ、おい。どうする？
男3 先生が相手じゃ勝ち目はない。ズラかろう。
男2 (男1に) おい、行こうぜ。先生が来るぞ。
男1 ああ。(僕に) へん、口ほどにもない奴め。うんこマン、そのうえ田舎マン、そのまた
うえに嘘つきマンのくせにイバるんじゃねえよ。
男2 行くぞ。
男1 ああ。
女1 先生、早く早く。男子が逃げちゃいます。
男1 委員長、お前とはいつか決智をつけねばならないとつねづね思っていた。
女1 な、何よ。やる気？ 女に手をあげるなんて、男として最低…。
男1 せーの！
女1 キャー！
男1・2・3 おぼえてやがれ！

と、ステレオタイプの捨て台詞を残して男1・2・3退場。

〈第四場〉

女1、周りに誰もいないことを確認して恐る恐る男子便所に入ってくる。

女1 大丈夫？

ぜんぜん大丈夫じゃない。ボコボコにやられている。僕、無言で立ち上がるとトイレットペーパーをちぎって鼻に詰める。

僕 ……礼は言わないよ。

女1 え？

僕 べつに助けてくれて頼んだ訳じゃない。

女1 ふーん。ボロボロのくせに、態度だけはデカイじゃない。

僕 何だよ。助ケテクダサッテ、ドウモアリガトウゴザイマスとでも言えば満足か？

女1 べつに。そんなことワザワザ言っただけで欲しい訳じゃないけど。ただ…。

僕 ただ？

女1 鼻にトイレットペーパーを詰めたまま言う台詞じゃないわよ。

僕 うるさいな、ほっといてくれ。

女1 無理しちやっつて。誰も見てなかったら、君、今ごろ眼に一杯涙を溜めてるところでしょ。

僕 そんなことあるもんか。誰が見ていようと見ていまいと、男はそう簡単には泣かないもんだ。

女1 そう言いつつも、目が潤んでるわよ。

僕 しつこいぞ。泣かないって言ったら泣かないんだ。

女1 泣くな。

僕 え…？

女1 泣くな。

僕 ……う。

女1 泣くな。

僕 く…。

女1 泣くな。

僕 う…泣かないよ。

女1 なかなかやるじゃない。君、ただの小学生じゃないね。

僕 はあ？

女1 この状況で優しく”泣くな”なんて言われたら、並の小学生だったら一発で泣き出してしまふところよ。それをあっさりかわすとは。君、ひよっとしてプロね。

僕 なに訳の分からないこと言ってるんだよ。

女1 君、弱っちいくせに頑固ね。

僕 余計なお世話だ。

女1 そんなんで疲れない？ たまには、肩の力抜いたら？

僕 そうはいかない。男が泣いていいのは、一生で三度だけだ。

女1 へえー。

僕 一つは、オギャーと生まれたとき。もう一つは、親が死んだとき。そして最後の一つは、財布を落としたとき。

女1 ふーん。一生で三度しか泣けないなんて、男の人って大変ね。

僕 と、父さんが言っていた。

女1 なんか変だな、それ。君のお父さんって、ちょっと変わってるね。

僕 父さんの悪口言うな！

女1 ……何よ！急に大きな声出さないでよ。あー、びっくりした。

僕 取り消せ！

女1 怒鳴らないでよ！

僕 取り消せ！

女1 何よ。なにもそんなに怒ることないでしょう。

僕 フン。

女1 はいはい、わかりました。悪かったわよ。私が悪うございました。

僕 ……。

女1 ねえ…。

僕 フン。

女1 ねえ…。

僕 ……。

女1 ファザコンっていうのは、なにも女の子に限ったものじゃないのね。

僕 なんかないか？

女1 いいえ、べつに。こっちの話です。

僕 フン。

女1 ねえ…、君のお父さんって、どんな人？

僕 ……。

女1 話を聞くに、さぞや強くて立派なお父さんなんでしょうね？

僕 ……ああ、強いよ。決まってるじゃないか。

女1 決まってるって言われてもねえ。

僕 父さんはね、闘士なんだ。

女1 君のお父さん、ゼンキョウトウ？

僕 ゼンキョウトウ、何それ？

女1 そうね。あの世代は、人数だけはやたら多いもん。蹴落とさなきゃならない人の数もハ
ンパじゃないんだ。

僕 そんな言い方は止せ。それじゃあまるで父さんが、弱いものイジメで成り上がったみた
いに聞こえるじゃないか。

女1 あら、ずいぶん人がいいのね。弱い者イジメをされた御本人が。強いってのはそういう
ことですよ。

僕 誰が弱い者だって？

女1 君。

僕 僕は…。

女1 だって、負けたでしょ、ボコボコにやられて。
僕 ……まだ負けて決まったわけじゃない。
女1 止めときなさい。何べんやったって同じよ。
僕 うるさいな。だいたい変だよ。おかしいよ。たかが学校でうんこしたぐらいで、どうしてここまで迫害されなきゃならないんだ？絶対変だよ。それとも何かい？この学校の奴らは、うんこなんて下品なモノは金輪際しないって言うのかよ。へん、そんなお上品な御方なら、いっぺんお目にかかってみたいよ、まったく。
女1 君、学校でう〇こしたの？
僕 え？
女1 そうか。惜しいことしたわね。
僕 何が？
女1 転校生って、たいした奴でもないのにただ転校生っていうだけでチャホヤされるものなのよ。君も、女子の間じゃけっこう評判よかったのになあ。う〇こマンじゃねえ。
僕 おい、そのうんこマンっていう呼び方は止せ。
女1 惜しかったわね。
僕 僕は平気さ。全然、これっぽっちも恥ずかしくないよ。うんこなんて、生きてる限り誰だってやってることじゃないか。恥ずかしがる方がおかしいよ。
女1 それ、本気で言ってる？
僕 ああ。
女1 じゃあ、う〇こをしたのが君じゃなくて、誰か他の人だったら？
僕 ……正直言って、バカにしたと思う。
女1 でしょう。
僕 女子はいいよな。大と小が、分かれてなくて。この苦しみ、この屈辱感は、男にしか分からない。……ハッ、いかんいかん。こんな考え方してるから、いつまでたってもこんなクダラナイ風潮がなくなるらないんだ。よし！
女1 お、意外と前向きじゃない。
僕 決めた！僕は選挙にうってでる！
女1 はあ？
僕 生徒会役員選挙に立候補するんだ。目指すは、もちろん生徒会長だ。
女1 そんなもん目指してどうすんのよ？
僕 僕は、まだ負けたわけじゃないぞ。断固闘うんだ。
女1 だから、なんでそうなるのよ？
僕 なんてって、分からない女だな、おまえも。いいか、今に見てるよ。僕が生徒会長に当選した暁には、学校が変わるぞ。
女1 フーン。
僕 学校でうんこをしても、バカにされない、イジメられない。それが僕の選挙スローガンだ。そんな明るい学校を、僕は目指すぞ。
声 エライ！よく言った！
僕・女1 え？

柳田、拍手をしながら便所より登場。

柳田 いや、素晴らしい。教師生活二十五年、我が生徒指導に間違いはなかった。見よ、この素晴らしい教育的効果を。ああ、先生やってて良かったなあ。

女1 柳田先生！

柳田 悪いが今の君たちの話は、全てそこで聞かせてもらいました。エライぞ、君。先生は感動したよ。

僕 え、僕？

柳田 よく決心したね。君には、花マルをあげよう。

女1 先生。

柳田 委員長、質問があるときは、手をあげなさい。

女1 (手をあげて) はい、先生。

柳田 はい、何ですか？委員長。

女1 先生は、いつからそこにいたんですか？

柳田 そうですね。かれこれ一時間ぐらい前からですか。

女1 一時間！

柳田 いや、まいりました。なにしろ先生、一週間越しの便秘でした。この一週間なにをやってもダメだったんですが、さつき給食でミルクを飲んだ途端にきましてね。あわてて便所に駆け込んだ方がいいが、座ってからがまた長かった。寄せては返し返しては寄せる波のような、悪戦苦闘のおよそ一時間。一時はもう駄目かと思いましたが、ようやくスッ………キリ

女1 先生！

柳田 委員長、質問のときは挙手。

女1 はい、先生。

柳田 はい、何ですか？委員長。

女1 先生、一時間も前からそこにいたんなら、どうして彼を助けてあげないんですか？

柳田 え？

女1 え？じゃないですよ。そこにいたんでしょ？何で黙ってたんですか？

柳田 とんでもない。黙ってなんかいませんでしたよ。なかなか出てこないもんですから、うんうん唸ってました。

女1 先生！

柳田 嘘です。本当は、足が痺れて立てなかったんです。

女1 はあ？

柳田 それも嘘です。本当の本当の所はですね、先生、君達に教室ではなかなか教わることの出来ない大切なことを、この機会にぜひ学んで欲しかったんです。それで先生は、涙をのんで黙って見てました。しかし君達は、どうやら大変いい経験をしたようですね。

女1 いい経験？ どこがですか？

柳田 おや？委員長、君には分からない。君は、どうですか？

僕 僕も分かりません。

柳田 よく考えて。

女1・僕 ……？

柳田 しょうがない。いいですか、君達は今の出来事を通して、とても大切なことを二つも学んだんですよ。

僕・女1 はあ。

柳田 まず、何でもかんでも先生を頼らず、自分たちで考え行動する、ということ学びましたね。それは自立心ということですよ。とくに君、

僕 はい。

柳田 転校早々のアクシデントにもメゲず前向きにがんばる君の姿勢には、先生、とても感動しました。

僕 いやあ、それほどでも。

柳田 先生は、君のように教師の手を煩わせない、自己完結した生徒が大好きです。いつまでも今日のこの気持ちを忘れず、自己完結したまま生きていって下さい。

女1 (小声で) ようするに楽しみたいんですよ、アンタは。

柳田 委員長。

女1 はい。

柳田 そして君達は、もう一つ、とても大切なことを学びましたね。それは、協力することです。

女1 え？

柳田 いくら立派な志といえども、たった一人では何も出来ないということです。君達は、力を合わせ協力するということも学ばなくてははいけません。

女1 どういうことです、先生。

柳田 協力することは良いことです。分かりますね、委員長。

女1 はあ？

柳田 君は、彼にたった一人で選挙を闘わせる気ですか？ 手伝ってあげなさい、委員長。

女1 ちょっと待ってください、先生。何で私が…。

柳田 もう一度言います。君達は、力を合わせ協力するということも学ばなくてははいけません。以上です。

女1 先生！

僕 先生。僕、本当に生徒会長に立候補してもいいんですか？

柳田 もちろんです。それが民主主義ってものですよ。

女1 ちょっと、どうしてくれんのよ。君のせいよ。何で私までが君に付き合って、かかなくていい恥をかかなくちゃいけないのよ。

僕 何だよ、まだそうなるって決まったわけじゃないだろ。

女1 いいえ、私には分かる。君は、大恥じかいて終わりよ。

僕 そうやって何でも決め付けるなよ。

女1 ねえ、お願いだから、もう一度考え直して。生徒会長なんかになったってツマらないわよ。

僕 悪いけど、僕はもう決めたんだ。

女1 どうして君は、弱っちいくせにそう頑固なの！

僕 うるさい！

柳田　ストップ！何をやってるんだ、君達は。仲間割れなんぞしている場合じゃないんですよ。生徒会役員選挙まで、もうあと一週間しかないっていうのに。

僕・女1　え！

柳田　期待してますよ。せいぜいガンバって選挙を面白くして下さい。それが民主主義つてものでしょ？

〈第五場〉

音楽。柳田と入れ替わりに、ワラワラと人が出てくる。よつてたかつて僕を、街頭演説中の政治家のいでたちへと変える。それが終わると人々は、来たときと同様素早く立ち去る。

女1 毎度お騒がせいたしております。転校生でございます。転校生でございます。転校生が皆様のもとへ、最後のお願いにやつて参りました。

僕、客席に下りて行って、お客様と握手なんぞしている。

女1 トイレをご利用中の皆さん、大変ご迷惑をおかけしております。転校生、転校生でございます。「う〇こ」をしてもバカにされないイジメられない明るい学校」をスローガンに、転校生は今日も元氣一杯がんばっております。ただいま転校生本人より、今回の生徒会役員選挙立候補にあたり、皆様へご挨拶がございます。先生、どうぞ。

女1、僕にマイクを渡す。

僕 トイレをご利用中の皆さん、大変ご迷惑をおかけしております。転校生でございます。選挙戦も終盤戦をむかえ、なげ今、あえてこの時期に立候補なのか。たいへん多くの皆さんから、戸惑いの声、あるいはお叱りの声をいただきました。しかし私は、今この場所で、そのことについて語ろうとは思いません。申し上げなくても皆さんは、その理由をよく承知してくださっている。私は、そう信じています。なぜ学校でうんこをしてはいけないのか？ 今までの生徒会は、全校生徒のこの声なき声に、耳をかたむけることすらいたしませんでした。これは、怠慢以外のなにものでもありません。本来生徒会とは、生徒の側からより快適な教育環境を考えていく、そういった場ではなかったのでしょうか。誤解を恐れず、私は今ここで、こう申し上げたいと思います。政治とは、うんこである！ 笑い事ではありません。共同体がその内に、知らず知らずのうちに抱え込んでゆく様々な穢れを、どのように解消してゆくのか。そのためだけに政治、かつての政は存在してありました。ますます複雑化し高度になってゆくこの現代社会。そんな時代だからこそ、私はあえて原点に立ち戻り、政治、かつての政を見直してみたいと思っております。便所からの政治を！うんこをしてもバカにされないイジメられない学校を！これこそ全校生徒の皆さんの偽らざる心境であり、また皆さんのご指示をいただけるものと私は確信いたしております。こんな学校にはもうウンザリです。力をあわせ、この学校を変えようではありませんか。あきらめないでください。皆さんの力が一つになったとき、政治はきつと変わります。そのためには、皆さん一人一人の：

男1、拡声器を手に登場。その後続く男2・3。

男1 汚い汚いうんこマンの転校生を生徒会長にしましょう！

僕・女1 え？

男2・3 汚い汚いうんこマンの転校生を生徒会長にしましょう！
男1 ダサイダサイ田舎マンの転校生を生徒会長にしましょう！
男2・3 ダサイダサイ田舎マンの転校生を生徒会長にしましょう。
僕 ありがとうございます。皆さんのあたたかいご声援を胸に、転校生は……。
女1 バカ！
僕 何だよ。せつかく僕のこと応援してくれてんだぞ。なにか答えなきや悪いだろ。
女1 バカね。別にあれは、君のこと応援してくれてる訳じゃないのよ。その逆よ、逆。
僕 え？
女1 あれは、ほめ殺しよ。
僕 ほめ殺し！
女1 その昔、ウヨクが対竹下戦の際に用い、大勝利を収めたと言われる伝説の作戦よ。
僕 それじゃあ、あれがトロイの木馬作戦、ノルマンディ上陸作戦とともに並び称されるあの有名な……。
女1 そう。世界三大作戦のうちの一つ、ほめ殺しよ。
僕 どうしよう？
女1 さあ、どうしようって言われても。君、どうしたらいいと思う？
僕 何とかしろよ。選挙参謀だろ？
女1 好きでなったわけじゃないもん。私は、先生に言われて仕方なく……
僕 今更そんなこと言うなよ。さつき、やるとなったら徹底的にやるって言ったじゃん。
男1 嘘つきマンの転校生、ついでに親父も嘘つきの転校生を生徒会長にしましょう！
男2・3 嘘つきマンの転校生、ついでに親父も嘘つきの転校生を生徒会長にしましょう！
僕 ……何だと？
男1 ん？
僕 もういつペン言ってみろ！
男1・2・3 嘘つきマンの転校生、ついでに親父も嘘つきの転校生を生徒会長にしましょう！
僕 言ったなあ、お前ら言っただけじゃない事を言ったなあ。しかも、一度ならず二度までも一回ならば間違いでしたと笑って済ませるが、二回目は許さん！
男1 バカか、おまえは。お前が、もう一回言えって言ったんだろ
僕 え？……とにかく許さん！父さんの悪口言うな、取り消せ！
女1 何だ、やればできるじゃない。こうなるとファザコンは強いよね。
僕 取り消せ！
男3 やなこった。嘘つきの転校生の親父は、やっぱり嘘つき。
僕 この野郎！
女1 あ、ちよつと……。
女1、ひしとしがみつiki僕を止める。
僕 何するんだ、はなせ。
女1 ダメよ。
男2 おいおい、その天高く振り上げた拳。その手は何だ？

僕 え？

男3 まさか生徒会長になろうって人が、暴力に訴える気かい？

僕 頼む、はなせ、はなしてくれ。武士の情けだ、せめて一太刀。

女1 駄目よ。ケンカ以外で何とかしなさい。皆見てるのよ。このままやられっ放しで黙ってたんじゃ、選挙で君の勝ち目は百パーセントないわよ。

僕 く…。

男1 ま、どうせやったって結果は見えてる。そうだろ？嘘つきの子供のくせにイバるんじやねえよ。

男1、僕の額を指でピンとはじく。

僕 待て！

チョン、と拍子木の音。すると、そこは刃傷松の廊下。

僕、女1を振りほどき、男1の襟首を引っ掴む。

男1 エエはなせはなせ、服が破れるわえ。まだ何ぞ用があるか。

僕 その用は。

男1 その用は。

僕 その用は。

女1 その用は。

男3 さあ。

僕 さあ。

男2 さあ。

女1 さあ。

男1 さあ。

僕 おのれ！

女1 判官殿、血迷うたか。殿中でごさる。

僕、力いっぱい握り締めた拳骨で男1に殴りかかると思いきや、チョン、とここで拍子木の音。

僕 証拠があればいいんだろ、証拠が。

男1 あ？

僕 父さんは嘘をつかない。見せてやるよ、真正正銘の本物の水洗便所を。

男2 無理すんなよ。

僕 逃げるのか？

男3 何だと？

僕 嘘か本当か、その目で確かめてみればいい。僕が連れてってやるよ、水洗便所のところまで。

男 1 おもしれエ。やれるもんならやってみろ。

僕 明日の朝 9 時に校庭に來い。行く先は、僕が生まれて育ったあの町だ。必ず自転車で來い。いいな？

男 1 よし、分かった。その勝負、受けた

僕 逃げるなよ。

男 1 そっちこそ。

暗転

〈第6場〉

僕に単サス。

僕 僕がはじめて水洗便所を見たのは、小学校四年の春だった。

音楽「スタンド・バイミー」

明るくなると、僕、男1・2・3、女1、横一列になって自転車をこいでいる。

横町を右に曲がり左に曲がり、坂を上ったり下ったり、踏切を渡ったりまったりして街を駆ける自転車。

僕 委員長、何でお前までついてくるんだ？

女1 私は君の選挙参謀なのよ。ついていけないで、どうするの？

僕 いや、どうするのって言われても…。

女1 私は、嘘つきの選挙の手伝いなんて真っ平ですからね。

僕 あ、言ったなあ！嘘つきって言ったなあ！

女1 はいは、知ってるわよ。君も、君のお父さんも嘘つきじゃないのよね。

僕 そうだ。

女1 だったらいいじゃない。次、どっち？

僕 僕…そこを右に曲がって。

自転車、右を向く。

男1 おい。この道、さっき通んなかったか？

男2 さあ？

男3 そう言われてみれば、そんな気もするけど。

僕 あ、次は左ね。

自転車、前を向く。

上り坂だ

僕 ハア。

男2 ヒイ。

男3 フウ。

男1 やっぱり通ったよ、この道。

男2 そうか？…。

男3 今更そんなこと言われてもなあ。

男1 おい、転校生。

僕 ……。

男1 おい。

僕 くッ、後にしろ、後に。この坂を上りきったら聞いてやる。

女1 ハア。

男2 ヒイ。

男3 フウ。

男1 くッ。

全員 よっこいしよ！

坂を上りきった。

全員 ふうー。

僕 あ、いい風だ。

女1 本当、気持ちいい。

男2 なんか、いい汗かいたってカンジだな。

男3 ああ。何かをやり遂げた後の充実感って、いいよな。

男1 見ろよ。ここからの眺め、最高だぜ。

全員 ……。

男1 で？

僕 で？って、何だよ。

男1 何だよ、じゃないだろ。朝からこっち、ずっと走りつばなしだぞ。

男2 そうだそうだ。

男3 いつになったら水洗便所に辿り着くんか？

僕 え？

男1 さつきから、どうも同じところをグルグル走り回っているような気がするんだけど。気

のせいかな？…

僕 気のせいだよ、うん。気のせい。

男1 本当か？

僕 うるさいな。もうチョットなんだから、黙って僕についてこい。

女1 次はどっち？

僕 こっちだ。

自転車、左を向く。

女1 ねえ、この道、本当に初めて？私も、何だか前に通った気がする。

男1 委員長、お前もか。

僕 この頃じゃ、日本中どこへ行ったって同じさ。何処へ行ったって必ず、何処かで見た風景に出くわすんだ。

女1 本当？…本当に道は間違っていないの？

僕 ……しつこいぞ。僕は正しい。僕を信じろ。

男1 お前に迷いはないのか？

僕 ない。

男1 それなら、前だけ向いてろ。さつきから何キロキロしてるんだ？何かをさがしてるんじゃないのか？

僕 別に。そういうわけじゃないさ。

男1 だったら、黙って前だけ向いてろ。そんなにキロキロされると、こっちは不安でしょうがない。

僕 おっと、そこを右だ。

自転車、前を向く

男2 うわ、すげえ坂だな。

男3 これを下るのか？

僕 ああ、一気に行くぞ。遅れるなよ。

男2 へえへえ。

僕 いくぞ。

坂を下る自転車。

男1 静かな街だな。

男2 ああ。

男3 本当に人が住んでるのか、この街。

女1 住んでるわよ。たまたま出会わないだけ。

男2 この街で生きて動いてるのは、ひよっとしたら俺たちだけじゃないかって、そんな気がする。

女1 はあ？

男3 だから、世界中の人間がバツと消えちまって、残ったのは俺たち五人だけ。

女1 なんて世界中の人間が、バツと消えるわけ？

男3 アメリカかソ連の気違いが、核ミサイルのボタンを押したんだ、きっと。第三次世界大戦だよ。

女1 バカね。

男2 集団神隠し事件だ。

女1 はあ？

男2 みんな神隠しに逢ったんだよ。残ったのは俺たち五人だけだ。どうしよう？

女1 ちよっと、あんた達どうしたの？こんなの何でもないって。

男1 委員長、お前は不安じゃないのか？

女1 不安、なにが？

男1 色々とさ。

女1 それじゃ分からない。

男1 それが分かれば苦労はしないさ。この頃ずっとそうなんだ。ただ漠然と、何となく、ぼんやりとした不安。

女1 病院にでも行ったら。付き合いきれない。

男1 嘘だ、委員長。お前だってこの不安を感じてる筈だ。こいつは時代の病さ。

女1 え？

男3 神隠しか？

男2 ああ。やっぱり神隠しだ。

男3 でも、ちよつと待て。神隠しに遭ったのは、本当にいなかった方か？

男2 ん？

男3 ひよつとしたら本当に神隠しに逢ったのは、残った俺たちの方かもしれない。

男2 まさか。

男3 いなくなつた人たちは、いなくなった自分に気付きもしないで残った俺たち五人について噂するだろう。「あのいなくなつた五人の子供たちは、きつと神隠しに逢つたのね」と。

男2 無責任だなあ。

男3 たしかに。でも本当の本当のところは、誰にもわかりやしないのさ。

男2 神隠されたのは、どっちだ。

男3 さて、本当に神隠しに逢つたのは、どっちでしょう？

女1 もう、いい加減にしてよ！

男2 何だ？

男3 どうした？

女1 お願いだから、訳のわからないこと言わないで！

男1 コーファンするなよ。遊びさ、ただの遊びじゃないか。

女1 遊びって……。変よ、皆どうしちやつたの？

男2 確かに変だ。

女1 でしょう？

男3 これだけ走り回ってるのに、人はおろか猫の子一匹見かけないなんて。

女1 だから、それは……。

男1 転校生、キヨロキヨロするなって言っただろ！

女1 大声出さないでよ！

男1 お前にキヨロキヨロされると、俺たちは不安でしようがないんだよ！

女1 やめて！

男2 あ！

キキーツ。自転車、横滑りして止まる。

女1 どうしたの、今度は何？

男2 猫だ。

女1 え？

男2 ほら、あそこ見てみろよ。黒猫がいる。

女1 ……あ、本当だ。誰よ、猫の子一匹見かけないなんて言ったのは。猫、ちゃんというじ

やない。

男1 シッ、静かに。黙ってる。

男2 あいつ、こつちを見てるぞ。

緊張した間。

女1 ちよつと、なんなのよ、これは。何が悲しゆうて、道路の真ん中で猫とニラメッコしなくちやならないの。

男1 バカ、黙ってるって言つたら。

男2 動いた。

男3 あいつ、道路を横切る気だぞ。

男1 ヤバイ。行くぞ。

自転車、猛スピードで坂を下り始める。

女1 待って、説明してよ。あの猫が、一体何だつて言うの？

男1 バカだな、お前は。あれは黒猫だぞ、委員長。

女1 そんなの見ればわかるわよ。で？

男1 だって、お前…。

男2 黒猫は、不吉の象徴だ。黒猫に前を横切られた人には、必ず良くないことが起こるんだ。

女1 そんなのくだらない迷信よ

男3 迷信？そう言つて取り合わなかった佐々木武彦君（仮名）十三歳は、黒猫に前を横切られた直後、鉄棒から落ちて前歯が欠けたんだぞ。

女1 …どうすれば、その不幸を避けられるの？

男1 方法は一つだ。

男2 要は、黒猫に前を横切らせなきゃいい。

女1 なるほど。

男3 あいつが道路を横切る前に、あいつを追い越すことが出来れば。

男1 スピードUPだ。もっとスピードを上げろ！

自転車の速度、さらに上がる。

男1 あ！猫が立ち止まった。

男2 いいぞ、そのまま後ろを向いて引き返せ。

男3 座り込んだぞ。

女1 こつちを見てるわよ。

男1 欠伸しやがった。

男2 でかい欠伸だな。

男3 ナメてるのか、俺達のこと。

女1 後ろ足で右耳の裏を搔いてるわ。

男1 お、寝ころがった。昼寝する気か？
男2 道路のど真ん中か？
男3 ゴロゴロ転がってるぞ。
女1 いやね、虫でもいるのかしら。
男1 今度は体を舐めだした。
男2 くるったように舐めてるぞ。
男3 そうだ、ナメてる。ああやって余裕を見せてつけて、俺達のことあざ笑ってるんだよ、あいつは。
女1 まさか二相手は猫よ。
男1 丸まったぞ、クルクルっと。
男2 マジで道路のど真ん中で寝る気だ。
男3 追いつけるもんなら追いついてみるって言ってるのさ。
女1 そう言われてみれば、なんか頭にくる態度ね。こっちは必死だっていうのに。
男1 猫のくせに。
全員 うおお！なめんなよ！

自転車の速度、さらに上がる。

風が唸る。

男1 急げ！何やってんだ。
侯 ちよっとスピード出しすぎなんじゃないか。
男1 怖じ気づいたか。
僕 何だって？
男1 怖いのか？
僕 怖いかだって、この僕がか？
男1 ああ。他に誰がいる。
僕 僕が何を怖がっているっていうんだ？
男1 スピードさ。違うのか？
僕 そんなもん怖くもなんともない。
男1 だったら……。
僕 違うんだ。聞けよ！
男1 何を？
僕 スピードが上がると、視界が、視界がどんどん狭くなるんだ。
男1 そういうもんだ。
僕 まわりの風景が、いろんな絵の具ぶちまけたみたいになって後ろにすっ飛んでゆく。
男1 当たり前だ。
僕 すべての景色が消え失せて、目の前のたった一点めがけて集束していくんだ。
男1 それがスピードだ。
僕 うわあ！

僕の自転車、ヨロヨロとよろめく。

男1 キョロキョロするなって言ったら！前だけむいてろ。

僕 そうは、いけないんだ。

男1 どうして？

僕 この辺りの筈なんだ、僕等の目指す脳病院は。

男1 とりあえず、そっちは後回しだ。

僕 ダメだ、チャンスは一度しかない。あつちの横町こつちの路地と迷いに送った挙句、そいつは突然目の前に目眩のように現れる。そこを逃したら、僕らは一一度とあそこに辿りつけない。

男2 お前、僕を信じるとか言っておきながら、やっぱり俺たちは迷ってたんじゃないか。

僕 だから…、あ！

男3 もういい。とりあえず、今は黒猫だ。

僕 おい、今の見たか？

女1 あいつが油断している間に。

僕 脳病院だ。見つけたぞ。

男1 黒猫を追い越せ。

僕 生まれ、脳病院だ。

男2 もうちよつとだ。あと十メートル。

僕 生まれ。プレーキ。

男3 あと五メートル。

僕 生まれ！

キキーツ。自転車、ものすごいプレーキ音とともに横滑りして止まる。

男1 ……黒猫が、

男2 ……前を横切った。

男3 俺たち…、もうお終いだ！

女1 不吉だわ。どうしよう。きつととんでもなく悪い事が起きるのよ！

僕 やった！ ついに見つけたぞ！

男1 バカ野記！

男2 お前があんな所でブレーキかけるもんだから、つられて俺たちまでブレーキかけちゃったじゃないか。

男3 お前のせいだぞ。

女1 もうちよつとだったのに。

僕 何言ってるんだ。やっと見つけたぞ、脳病院。僕らの旅の目的地だ。

男1 後にしろって言っただろ。

僕 たかが猫だろ。伺にも出来やしないよ。あんなのはほつといて、行こうぜ。
男2 行くつて、どこへ？

僕 きまつてるだろ。水洗便所を見にだ。
男2 いや、そうじゃなくて。この坂を上るのか？
僕 ああ。坂の途中に病院があっただろ。見なかったのか？
男3 おいおい、勘弁してくれよ。
僕 うるさい文句言うな。
男1 わかったよ。こうなったら俺たち、トコトンお前についてくよ。だけど、もしその病院
に水洗便所がなかったときは、どうなるかわかってんだろ？
僕 ああ。そのときは僕のこと、嘘つきでも何でも好きなように呼べよ。文句は言わない。
男1 よっしゃ。
僕 行くぞ

自転車、後ろ向きになり坂を上がり始める。

男1 くッ
男2 くぬぬ。
男3 はっ。
僕 とりやつ。
女1 よっこいしよ。
男全員 はあー（力が抜ける）。
男1 くッ。
男2 くぬぬ。
男3 はっ。
僕 とりやつ。
女1 よっこいしよ。
男全員 はあー。
男3 ミョーな声出されると、力が抜けちまうんだよ。
女1 ねえ、ここは無理をしないで自転車おりにて押した方が…。
男1 俺に話しかけるな。
女1 え？
男1 声を出すと、いっしょに力まで抜ける。
僕 けっ。この程度の坂でそのザマか。たいしたことねえなあ。
男1 何だと。へっ、俺はまだ本気なんか出しちゃいないぜ。
僕 ほお。だったら、ひとついいこと教えてやる。この坂はな、小学生の間では根性坂と呼ばれている。
男1 なに、根性坂！
男2・3 根性坂！
僕 この意味、わかるな？

男1 ああ。

女1 根性坂？ねえ、何それ？

男2 小学生の間に伝わる男の名巻を賭けた我慢くらべだ。

男3 急坂を、自転車に乗って一度も地面に足をつけずに上りきる。苛酷な、あまりに苛酷なゲームだ。

男2 一見単純だが、小学生にとってその負担は想像以上。

男3 脚力、持久力、そしてなにより根性がその勝敗を大きく左右する。まさしく根性坂。

女1 呆れた。よくそんなことに真剣になれるわね。

男1 くッ。

僕 なかなかやるじゃないか。だが、僕の立ちこぎについてこれるかな。

男1 それがどうした。俺だって立ちこぎぐらい出来るわい。

僕・男1 うおりやあ！

男2 お、俺らも続くぞ。

男3 おう。

男全員 うおりやあ！

女1 ちょっと、私はそんなバカなことには付き合わないわよ。

男1 勝手にしろ。

女1 私は、自転車おりに押していくからね。上でちゃんと待ってるのよ。私一人、おいてっ
ちやイヤよ。ねえ、ちゃんと聞いてる？ 待っててよ。わかった？

とか何とか言いながら、女1退場。

男1 委員長は脱落か。しよせん女には、男のロマンはわからない。

僕 ずいぶん余裕があるじゃないか。喋ると口から力が抜けるんじゃないのか。

男1 うるさい。

〈第七場〉

自転車のペダルを一こぎする度に、街は夕方になってゆく。

男3 おい、いま何時だ？

男2 さあ。何で？

男3 変じゃないか？

男2 変、何が？

男3 見ろ。いつの間にか、もう太陽が傾きかかっている。

男2 あれ、本当だ。

男3 俺たち、そんなに自転車走らせたっけ？

男2 夕方だ。そろそろ俺たち帰らなくちゃ。

男3 待てよ。なんか変だ。

男2 どうしてさ？

男3 何だか急に夕方になったカンジだ。

男2 気のせいだよ。

男3 いや、やっぱり変だ。どうも妙に空々しい夕方だ。

男2 俺、もう帰りたいな。

男3 騙されるな。

男2 なに言いだすんだ、突然。

男3 いや、マガイモノの匂いがあるんだ。この夕方は本物じゃない。

男2 マガイモノって、どんな匂いさ？

男3 嗅ぐと鼻がムズムズしてきて、思わず、フィクション、とクシヤミがでる刺激臭。

男2 それは風邪だよ。家に帰って、さっさと寝た方がいい。

男3 そうか、風か。坂の上から吹き下ろす風が、マガイモノの匂いを運ぶんだ。

風。

男2 ……

男3 なに考えてるんだ？

男2 うん？ツトム君のこと。

男3 ツトム君って、どのツトム君？

男2 ほら、五組の山口ツトム君。

男3 ああ。山口さんちのツトム君ね。

男2 彼、見たんだってよ。

男3 何を？

男2 アイツだよ。

男3 まさか。また出たのか？

男2 ああ。出たらしい。

男3 信じてるのか？

男2 うん…、でも、わかんない。
男3 新聞には、いないって書いてたぞ。
男2 でも、ツトム君は確かに見たって言うし…。
男3 ツトム君、この頃少し変だったじゃないか。
男2 ツトム君、嘘ついたのか？
男3 そうは言わないけど。
男2 俺、帰りたいな。
男3 騙されるなつて。この夕方はマガイモノだ。
男2 でも…ふあ、ふあ、ふいくしよん！
男3 ほら、やっぱりフィクションだ。
男2 寒くないかい？
男3 え？
男2 この夕方、マガイモノだけに妙に禍々しい。いやな予感がするんだ。
男3 それは風邪のせいだよ。熱でもあるんじゃない？
男2 そうか、風か。坂の上から吹き下ろすこの風は、ただの風じゃなかったんだ。
男3 ふいくしよん！
男2 あ。

坂の上に、いつの間にか女が立っている。

僕 うおりやあ！
男1 まだまだ！
男2 委員長？
僕・男1 え？

自転車、止まる。

男3 委員長。お前、いつの間に俺たちのこと追い越したんだ。
女 ……。
男2 途中に近道があったんだ、そうだろ？教えてくれればいいのに。ムキになって坂上がつて、損しちゃったな。
女 ……。
男3 どうしたんだ？おい、なんとか言えよ。
女 ……。
男2 お前、本当に委員長…。
女 なにしてんの。そんな所にいないで、早くこっちに来たら。
男2 ……あ。

少年達、なにかに憑かれたようにフラフラと女に歩み寄る。

男1 …あ？

ハッと我にかえる男1。

女 どうしたの？

男1 なんかヤバイ。皆、はなれる！

女 どうしたの？ 病院は、もう目の前よ。

男1 お前、委員長じゃないな。

女 なに言ってるの。

男1 顔を見せろ。

女 え？

男1 顔を見せろ。

女 …顔は失くしたの。

男1 なんだって？

女 ホラ、顔はここよ。よく見て。

男1 夕陽が邪魔をするんだ。逆光でよく見えない。

女 もうちよっと近くに寄れば。

男1 ああ（フラフラと寄っていく）…。やっぱりダメだ！

女 どうして？

男1 その顔を一目見たとたん、何かとんでもいことになりそうで。

女 意気地なし。

男1 慎重なんだよ。

女 女に恥をかかせる気？

男1 何でそうなるんだ。

女 坊や、女のこと何にもわかつちやいないのね。

男1 ダメだ！みんな。行くな！

女の顔が見える。大きなマスクをしている。

女 ねえ私、きれい？

男2 …あ。

男3 う…。

女 ねえ、きれい？

僕 あ…う、うん。き、きれいだよ。

女 本当に…？

男2 も、もちろんです、なあ？…

男3 あ、ああ。

女 これでも？

女、ゆつくりとマスクを取る。その下から耳まで裂けた大きな口が…。

全員 うわああああ！でたああ！

自転車にとび乗り、一目散に逃げだす。

半べそをかきながらペダルをこいでいる。

男2 う、うえ、ひつく…ひつく。

男1 後ろを見るな！

男2 目が合ったらどうする。追いかけて来るぞ。

男3 あ。

男1 どうした？

男3 目が合っちゃった。

男1 バカ！

男2 うえーん（泣く）。

男1 泣くな。必死でこげ！

男2 ひつく。無理だよ。逃げられやしないよ。口裂け女は、百メートル三秒で走るんだよ。

僕 来た！

全員 うわああああ！

口裂け女、鎌をふりあげ追ってくる。

男2 あんな鉄で切り刻まれるなんてイヤダよお。

僕 二手に別れよう。

男1 あ？

僕 このままじゃ、いずれ追いつか…、うわあ。

男1 何だ？

僕 もう追いつかれてる！

全員 ヒーッ！

必死でペダルをこぎ、少しだけ口裂け女を引き離す。

男1 あそこの横道を入ろう。

男3 ああ。

男1 お前らは右へ行け。俺たちは左へ行く。いいな？

男2 うえ、ひつく、うん。

男1 あいつを振り切ったら、病院へ行け。あの病院の前で落ち合おう。

男2 ひつく、捕まらないでね。

男1 そっちこそ。

僕と男1、上手へ。男2と男3、下手へ。それぞれ退場。

口裂け　　待てエー，

口裂け女、花道を通過して退場。

〈第八場〉

僕と男1、飛び込んでくる。自転車にはもう乗っていない。

壁が出てきて、僕と男1を取り囲む。

僕
あっちだ。

男1
壁は動き、行き止まりになったり三叉路になったり十字路になったり。道は刻々と変化する。迷路の街を逃げ回る僕と男1。

男1
こっちだ。

僕
口裂け女は？

男1
追ってこないぞ。なんとか振り切ったみたいだ。

と、安心するのはまだ早い。僕と男1につかず離れず、迷路の街にチラつく口裂け女の影。

男1
どっちだ？

僕
こっちだ。…いくつだっけ？

男1
え、なんだって？

僕
僕らが曲がった曲がり角の数だよ。

男1
ええと、ひい、ふう、みい…。

僕
よ、いつ、むう、なな…、さっきのが十一番目だ。

男1
それがどうした？

僕
次の次、十三番目の曲がり角を曲がったら、そこが脳病院だ。

男1
変わった道の覚え方だなあ。

僕
と言ってる間に、はい、十二番目。

男1
次はどっちだ？

僕
あっちだ。

十字路に差しかかる。

男1
チョイ待ち。

僕
あ？

男1
この道は止そう。

僕
どうして？もうちよつとなのに。

男1
なんだかイヤな予感がするんだ。

僕
変な奴だな。

男1
待てよ。夕方の十字路は危ない。出会い頭、なんに出くわすかわかったもんじやない。

僕
平気さ。

男1
待てたら。他の道を行こう。

僕、かまわず十字路へ一步踏み出す。

曲がり角からフラリと女が現れる。

僕 え？

女 あら、またお逢いしましたね。いつぞやは、どうも。

男1 あ。

僕 …ど、どちらでお会いしたんですたっけ…。

女 ごめんなさい。私はいま嘘をつきました。偶然を装ったのは女の手管。十三番目の曲がり角をあなたが曲がるのはわかってましたから、私はここであなたを待ち伏せたんです。

男1 な、何のことだかさっぱり…。

女 もう一度、一目あなたにお逢いしてお聞きしたかったです、どうしても。

男1 やっぱり、

僕 それを聞くの。

女 はい。お約束ですから。…ねえ。私、きれい？

僕・男1 出たあ！

男1 逃げる！

男1、僕の首根っこを引つ掴むと逃げだす。

壁が動き、僕と男1の行く手を遮る。

僕 行き止まりだ。

男1 こっちだ。

ことごとく壁が行く手を遮る。何処へ逃げてもみんな行き止まり。

僕 ダメだ。

男1 ちくしょう！どうなってんだ？

口裂け 今日は、

僕・男1 ヒッ。

口裂け きつと今日こそは、答えを聞かせて下さい。私には、もうあんまり時間がないんです。

あの日、麻酔のさめきらぬ重い体を引きずって病院を抜け出して以来、私はただ夕方ばかりを求めて街を彷徨ってきました。麻酔が切れた時に襲ってくるだろう強烈な痛みに怯え、曲がり角から曲がり角へ。だけど、ここで行き止まり。ここより先に夕方はないんです。お願いです。太陽が沈みきってしまったら、私の麻酔は切れてしまいます。だから、その前に。夕方の光線が私の感覚を麻痺させている間に。ねえ、教えて。私、きれい？

僕 答えてあげてもいいんだけど…。

男1 その手に持った鎌。それは一体何に使うんだ？

口裂け　これはね、坊やが大人になっていない毛が生えてきたなら、もとのツルツルにしてあげるためよ。

僕　その大きなマスクは何のため？

口裂け　昼にジャジャ麺を食べたから、ニンニク臭い息を坊やの顔に吹きつけたためだよ。

男1　その真つ赤なコートは何のため？

口裂け　クソガキの返り血を浴びても汚れが目立たないからさ！

僕・男1　ヒーツ。

口裂け　さあ、答えるんだよ。私、きれい？

僕　おばさん、興奮しないで。本当のこと言っても怒らないって約束して。

男1　バカ。

口裂け　本当のことって何よ！

男1　こっちだ。

僕と男1、十字路から逃げだす。

と思つたら、もとの十字路に逆戻り。

口裂け　私、きれい？

僕　うわあ！

男1　こっちだ。

同じことが何度か繰り返

口裂け　私、きれい？

僕と男1、その場にへたり込む。

僕　（息があがっている）　ハア、ハア、何故だ…。

口裂け　無駄よ。日本中の曲がり角という曲がり角からお肌の曲がり角まで曲がってしまった女が、最後にたどり着いた曲がり角ですもの。ここから先に道はないのよ。私、きれい？きれいじゃない？きれい？きれいじゃない？タ方の十字路で止まらなくなったリフレインは、いつしか道までねじ曲げ、繰り返しさせる。

僕　そうか。どうやら僕等は、無限に繰り返される口裂け女の思考の十字路に迷い込んでしまったらしい。

男1　何だ、そりやあ？

僕　つまり、彼女の問いに答えてリフレインを止めなければ、僕たちは一生この十字路から抜け出せないんだ。

男1　そんな…。

口裂け　私、きれい？

僕、男1の背中をポンと押す。

男1 え？ ちよつ、ちよつと待つてよ。

僕 いいから。

男1 なんで俺が…。

口裂け ねえ。私、きれい？

男1 き、きれいです。

口裂け これでも？

口裂け女、マスクを取る。

口裂け これでも？

男1 き、きれいですよ。

口裂け これでも？

僕 き、きれいですつてば。

口裂け これでも？

僕 ダメだ。リフレインが止まらない！

口裂け これでも？これでも、これでも、これでも、これでも……

僕・男1 誰か！このリフレインを止めてくれ！

口裂け ……これでも、これでも！

言うが早いか口裂け女、鎌を大上段にふりかざす。

僕・男1 ヒーツ！

口裂け ああ。

絶体絶命のその時、何が起こったのか口裂け女は、一声呻くとその場にうずくまってしま
う。

僕・男1 …？

口裂け 痛い、痛い。顔が痛い。

苦しむ口裂け女。

男1 何だ？

僕 よく分からないけど、なんか痛がつてるみたいだ。大丈夫ですか？

男1 バカか、おまえは。何だか知らないが、今がチャンスだ。逃げよう。

口裂け そこにいるのは誰！

僕・男1 うっ（逃げるチャンスを失う）。

口裂け そっちよ。その曲がり角から視線を感じるわ。痛い、お痛い。出てきなさい！

声 おいどんの事でござすか。

男、曲がり角から瓢然と現れる。

口裂け おやじ、何処から入ってきた？

男 わしか？ばってん、それを聞きたいのはおいどんの方たい。中洲の屋台でちよこつと一杯ひっかけて豚骨ラーメンも食うて、さて家に帰ろうかと思うたら、これがいつまでたつてん家に着きやせん。ここ、どこね？

僕 酔っ払いだ、酔っ払い。

男1 この際だ、なんだってかまうもんか。おじさん、助けて下さい。

男 ん、なんね、どぎやんしたんね？

男1 それが…。

男 まあまあ、そげえ慌てんでも。話は聞くけえ、ゆっくり酒でん飲みながらやろうや。心配すんな、やせてん枯れてん九州男兒たい。悪いようにはせんけん。ほい、坊やも一杯やらんかい、西の関。

男、一升瓶をむける。このメチャクチャな詛りの男を、仮に九州男兒と呼ぼう。

口裂け おい、

男1 このおじさん、いっちゃってるよ。

僕 おじさん、酒なんて飲んでる場合じゃないです。

九州男 そげえカテえこと言うない。チンチンに毛が生えちよつたらもう大人たい。ほれ、飲まんか。

口裂け こら、

僕 いや、そうじゃなくて…。

九州男 わかった。毛が生えちよらんでも大人ちゆうことにしよう。おいどんが許可する。ほれ、飲め。

口裂け やい、酔っ払い！人の話を聞け！

九州男 ん、なんね？

口裂け 痛い。人の顔を無遠慮にジロジロ見るな。

九州男 無視するなっちゆうたり見るなっちゆうたり、ややこしい女ばい。

口裂け もうすぐ夕陽が沈む。麻酔が切れかかっているんだ。

九州男 ねえちゃん、虫歯が痛えんかい。そげえんときや酒たい。ほい、ねえちゃんも一緒にやろう。

男1 おじさん、ダメだつて。早く逃げよう。

九州男 なしか？おいどんが折角…。

口裂け 逃がさないわよ。夕陽の沈む前に、答えを聞くまでは。

九州男 よっしゃ。よう言うた、ねえちゃん。

僕 そうだ。みんな飲もう！

男1 え？

九州男　ちえずとお！坊主、わかってきたでござすな。ほれ、飲むばい。

男1　あ、転校生。おまえ、まさか…。

僕　　ウイー、ヒック。

男1　飲んでるのか？

僕　　ヒック。

男1　いつの間に。

僕　　ウイー、ヒック。ばつか野郎。酒でも飲まなきややつてらんねえ。他にどうしろって言うんだ。

男1　だからって酒に逃げてどうする。

僕　　おまえも飲め。飲んで、イヤなことは全部忘れよう。

男1　バカ。チクショウ、こういう場合、先に酔っ払った方の勝ちだよな。ずるいぞ。

僕　　ガハハハ。

九州男　おい、もう一人の坊主。きさんも飲め。

男1　えい、こうなりやヤケだ。

男1、一升瓶を受け取るとゴクゴク飲む。

男1　プハーツ。

九州男・僕　　おお。

異様に盛り上がる僕と九州男児。

男1　ダメだ。毎晩親父の酒くすねちや晩酌してるもんだから、これっぽっちじゃ全然酔っ払わないよ。いいよな、こいつら。こんな簡単に酔っ払えて。

口裂け　やい、こら。私を無視して勝手に盛り上がるな！私は無視されるのが大嫌いなんだよ！

男1　あ、忘れてた。おい、転校生。現実から逃げてる場合じゃないぞ。

僕　　しゃあしいのお。なんじやい。まだ何か用があるんか。

口裂け　な、何よ、その目は（ひるむ口裂け女）。

男1　目がすわつてら。

口裂け　フン、上等じゃない。戦争からこっち、強くなったのは女とストッキングばかりのこの御時世。情けなさを優しさと言いくるめて細々を殺と生き残ってきた男たちよ。あんたに、行くアテのない女の問いを真正面から受け止める度胸があるっていうの？

僕　　よかよか、よかことですたい。その問いとやら、日本全国の男を代表して、九州男児のおいどんが答えるでござす。

男1　お前、いつから九州男児になったんだ？

口裂け　その言葉、覚えたわよ。…ねえ。私、きれい？

僕　　……。

口裂け　私、きれい？

僕　　……グーツ。

間

男1 寝ちゃったよ、こいつ。

口裂け ……いつもそうよ。いつも肝心なときに限ってはぐらかされる。

男1 おい、起きろよ。なんか怒ってるぞ。おまえのせいだぞ。責任取れ。

僕 グーツ。

口裂け もう遅い。女に恥をかかせやがって。あんたら全員、死ぬまでこの十字路を彷徨うがいい。

男1 そんな…、あ。

僕、ムクリと起き上がる。

僕 ブスだ。

口裂け え？

僕 (口裂け女を指さして) ブス。

それだけ言うと僕は、また寝てしまう。

口裂け ああああ！

苦しむ口裂け女。

口裂け 痛い、痛い。顔が痛い。麻酔が切れた。

ゴゴゴゴゴ。地鳴りがする。

九州男 なんね、こん音は？

男1 道が元に戻るんだ。おっさん、逃げよう。

九州男 ん？

男1、眠ってしまった僕を背中におぶう。

男1 逃げよ。グズグズするな。早くしないと…。

口裂け 逃がさないわよ。

男1 ほら。

口裂け 道よ、閉じろ。こいつらを外にやるな。閉じ込めろ。

九州男 ばってん、道は道ばい。

口裂け え？

九州男 坊主、サンキューたい。おはんらのおかげで久々にうまか酒ば飲んだたい。おいどん

は、そろそろ行くでござす。

男1 もう遅いよ。道は閉じられちまった。

九州男 そげな道などありやせん。それが道である限り、道の行く先は道、その先も道、どこまで行っても道は未知、イマダシラズに通じちよる。

男1 そんな事言われても。

九州男 足の裏の感覚は研ぎ澄ますつとね；ほうして一步踏み出したなら、確かな未知ば足の裏に感じるんでござす。

口裂け 行かすもんですか。整形手術の傷が痛むのさ。この痛み、どうしてくれよう。

九州男 (小声で) しもうたのお。あの女、酒乱ばい。酒は飲ますんじやなかつたとよ。

口裂け あたしやシラフだよ。

九州男 ありや、聞こえたとね。

口裂け 聞いたとも。耳の奥に、あの忌まわしい言葉がまだ渦を巻いている。

九州男 ブスブスブスブスブスブス……。

口裂け …ブス、ブス！キーツ、くやしい。

男1 おっさん！

九州男 なんね？ブスはブスばい。本当のこと言うて何が悪い。

口裂け 痛い、痛い。

男1 どんどん事態は悪くなる。

九州男 だったら女、おはんは坊主に何と答えて欲しかったとでござすか？

口裂け ブスって言うて欲しかったんだよ。

男1 え？

口裂け そうさ。どうしたつて私はシルシつきだよ。例えば教室で給食費が紛失したなら、私は犯人にしてもいい人間なんだよ。

九州男 おはん自身が排除の論理に従うんでござすか。

口裂け 好きさだけ石を投げるがいい。ただし用心しろ。お前らが追いやった闇の領域から、いつかニョッキリ腕が出てきて、手に持った鎌でお前らの喉笛を切り裂くぞ。

九州男 おはんに石を投げた人間も、また大きな何者かに石を投げられる存在だとどうして気付かん。

口裂け だったら、あんたはどうなのさ？あんたもまた、気が付けば誰かに向かって石を投げてるんじゃないのかいも

九州男 そんなことは、わかっているよ。ただ……。

口裂け ただ？

九州男 君にだけは、飛んできた石つぶてのせめて一つか二つは、この手で払い落としてあげたい。

口裂け え？

九州男 こんな気持ちって、変かな？

目裂け それってひよつとして…。

九州男 恋？

口裂け 嘘。

九州男 嘘びよーん。……笑うな！

男1 え？

九州男 おはんらの中の誰が、この女を笑えるっちゅうんかい。

男1 おっさん、誰にむかってしゃべってるんだ？

九州男 お客様。

男1 はあ？

口裂け 殺ス、絶対殺ス。

九州男 さあ行け、坊主。こっからは若人の出番ばい。

男1 なに言ってるんだ。

九州男 足の裏の感覚は研ぎ澄ますつとね。ほうして一歩踏み出すんでござす。

男1 無責任なこと言うな！

九州男児、男1の後ろに隠れる。むりやり前へ押し出される男1。

僕 ……なに、この匂い？

僕、目を覚ます。寝ぼけている。

九州男 父さんの匂いたい。

僕 ああ、ポマードだ。

口裂け ヒッ。

男1 え？…ポマード？

口裂け ヒッ。

男1 ポマード。

口裂け ヒイツ。

男1 ポマード！ポマードー・ポマード！

口裂け ギャー！

〈第九場〉

壁が壊れ、四方八方に飛び散る。口裂け女も九州男児もいなくなり、道の真ん中にポツンと取り残された僕と男1。

僕 頭、痛い。

男1 え？

僕 ガンガンする。

男1 おい、いつまで背中にいる気だ。いいかげん降りろよ。

僕 ああ、ゴメン。うつ。

男1 どうした？

僕 気持ち悪い。胸がムカムカする。

男1 おい、こんな所でゲロ吐くなよ。

男1、あわてて僕を背中から振り落とす。

僕 うん。

男1 大丈夫か。そういう時は無理してでも吐いちゃったほうが、後が後が楽だぞ。なんなら

手伝おうか。

僕 いい、我慢する

ワアオーン。どこか遠くの方で犬が鳴いている。

僕 あ、犬が…。

カサカサと暗闇の中を何者かが動き回る音がする。ヒソヒソとなにやら話し声も聞こえる。

男1 誰だ、誰かそこにいるのか？

パツと明るくなると、白衣を着た人達がそこらじゅうを忙しそうに走り回っている。

白衣の人1 君達。

白衣の人2 君達。

白衣の人3 君達。

白衣の人4 君達。

白衣の人5 君達、

男1 何なんだ、あんた達は？

白衣の人1 我々はツクバ…。

白衣の人2 バカ。

白衣の人3 バカ。

白衣の人4 バカ。

白衣の人5 バカ。

女1 ツクバつていえば、あの四六のガマで有名な。

白衣の人1 そう、それ。その四六のガマ。

白衣の人2 ちがーう。

白衣の人3 ちがーう。

白衣の人4 ちがーう。

白衣の人5 ちがーう。

男1 ガマが俺たちに何の用だい？

白衣の人1 ガマじゃなーい。

白衣の人2 ガマじゃなーい。

白衣の人3 ガマじゃなーい。

白衣の人4 ガマじゃなーい。

白衣の人5 ガマじゃなーい。

男1 いいから用件を言えよ。

白衣の人1 犬を見なかったか？

白衣の人2 見なかったか？

白衣の人3 見なかったか？

白衣の人4 見なかったか？

白衣の人5 見なかったか？

男1 犬？

白衣の人1 それが、ただの犬じゃない。

白衣の人2 ただの犬じゃない。

白衣の人3 ただの犬じゃない。

白衣の人4 ただの犬じゃない。

白衣の人5 ただの犬じゃない。

女1 ただの犬じゃないって、どんな犬よ？

白衣の人1 見たのか？

白衣の人2 見たのか？

白衣の人3 見たのか？

白衣の人4 見たのか？

白衣の人5 見たのか？

女1 いいえ。猫は見たけど犬は見なかったなあ。

白衣の人1 ここではない。やはりあっちだ。

白衣の人2 あっちだ。

白衣の人3 あっちだ。

白衣の人4 あっちだ。

白衣の人5 あっちだ。

白衣の人達、風のように去る。

女1、登場。

女1 見つけた！

僕・男1 うわぁ！

女1 ちょっとあんた達、どこ行ってたの？

僕 あ。

男1 委員長。

女1 待っててよって言ったのに。

男1 おまえ、本物か？

女1 はあ？何言ってるの？

僕 本物みたいだ。

女1 本当にどこ行ってたの？あっちこっち捜しまわって、あたし疲れちゃった。

僕 僕に聞くな。ところどころ記憶がとんでるんだ。僕にもよくわからない。

女1 はあ？何があったの？

男1 じつは。

僕 うっ。やっぱりダメだ、気持ち悪い。僕、ちょっと吐いてくる。

男1 大丈夫か？手伝うか？

僕、無言で隅っこの暗闇に消える。

ワアオーン。今度のは先刻よりも随分近くに聞こえる。

ワアオーン、ワアオーン、ワアオーン。つられてあっちこちから遠吠えが上がる。

僕の声 あ！

僕、暗闇から飛び出してくる。

男1 すっきりしたか？

僕、無言で首を横に振る。

男1 なんだ。そういう時はだな、中指をこうやって…。

僕 いや、吐くには吐いたんだけど、途中でびっくりした拍子に残りを全部飲み込んでしまった。

男1 何だ、そりや。

僕 あそこに何かいる。

女1 何かって、何よ？

僕 電信柱にもたれてゲエゲエやってたら、そばのゴミ袋を漁ってた汚い犬が突然クルツと

こつちを振り向いて……。
声 うるせえな。
僕 しゃべったんだ！

暗がりから奇妙な生き物がヌツと出てくる。そいつは胴体が犬で、頭が人間の化け物、人面犬である。

女1 人面犬だ！

僕 人面犬？

女1 見ての通り体が犬で、頭が人間のどつちつかずの怪物よ。

男1 噛みついたりしないのか？

女1 大丈夫。人に危害は加えないらしいから。

人面犬は、アニメキャラクターの絵がついたちよつと恥ずかしい紙袋を手から下げている。その紙袋からマンガを取り出すと、人面犬は読み始める。

人面犬 ……ムヒツ、ムホホ、クヒツ。

女1 笑ってるの？

男1 ああ。そうなんじゃない、多分。

僕 カメラ、持ってくればよかったなあ。

人面犬、僕達の視線に気付く。

人面犬うるせえな。ジロジロ見るなよ。ほつといてくれ。

女1 なに読んでるのかしら。

男1 さあ？

僕達、人面犬の読んでいるマンガを興味シンシンにのぞき込む。

人面犬 ……ムホ、何だよ。

僕・男1・女1 △△△△？

人面犬 ムホ。オタク、△△△△好きなの？

女1 あ？う、うん。

人面犬 △△△△、いいよね。

僕 え、まあ。

人面犬 ○○○○もあるよ。読む？

男1 ○○○○？

人面犬 △△△△好きだってことは○○○○も趣味でしょ、オタク。
僕 オタクだって。

男1 オタクだ、オタク。オタクの人面犬だ。
女1 ○○○○、ねえ。
人面犬 やっぱり。オタク、拙者とピッタリ趣味が同じだ。
女1 あ、そうなの。
男1 委員長、おまえ、オタクだったのか。
女1 私は違うわよ。あんたのことじゃない？
男1 俺も違うよ。転校生、お前か。
僕 僕も違うよ。
人面犬 見たときピーンときたんだ。オタク、拙者と同じ目をしてる。
僕・男1・女1 そんな目はしてない！
人面犬 あ。

とても悲しそうな目をする人面犬。

女1 あ、…ごめん。そんなつもりじゃ…。
男1 おい。
女1 何よ？
男1 委員長。アイツ手なずけてさ、俺達のペットにしようぜ。
女1 え？
男1 いいじゃん。人面犬がペットだなんてスゴイぞ。
人面犬 ……。
男1 ……、いいよね。
人面犬 そうだよね、そうだよね。
僕 僕も好きさ、○○○○。
人面犬 □□□□は、どう？好きでしょ。
女1 うん。
人面犬 やっぱり、やっぱり。わかるんだ、なんとなく。読む？
女1 え？
人面犬 □□□□、読む？
女1 あ、えっと、うん。

人面犬、紙袋の中をゴソゴソ探す。

人面犬 ごめん。今、□□□□持ってないや。おかしいや。たしかに拙者、この中にいれた
と思うんだけど。
女1 いいわよ、別に。今すぐく読みたいって訳じゃないから。
人面犬 おかしいなあ。！そうだ。家においでよ。
女1 え？
人面犬 家においでよ。家には何でもあるんだ。マンガもビデオも、それからそれから、と
にかくあるんだ。おいでよ。

女1 今すぐ？

人面犬 オタクもオタクもオタクも、みんなでおいでよ。おいでよ、おいでよ。おいでったら。

人面犬、僕の手をもって強引に引つ張って行こうとする。

ワアオーン。遠くの方で遠吠えが上がる。それに答えるようにあちこつちから遠吠えが返ってくる。

人面犬 あ。

怯える人面犬。

人面犬 行かなくちゃ、行かなくちゃ。奴らが来る。

声 何処へ行くんだい？

人面犬 あ！

気がつくと、まわりをグルリと先刻の白衣の人達に取り囲まれている。

白衣の人1 見つけた。

白衣の人2 見つけた。

白衣の人3 見つけた。

白衣の人4 見つけた。

白衣の人5 見つけた。

人面犬 見逃してくれよお。拙者、あんな所に帰るのはイヤだよお。

白衣の人1 ダメだ。帰るんだ。

白衣の人2 帰るんだ。

白衣の人3 帰るんだ。

白衣の人4 帰るんだ。

白衣の人5 帰るんだ。

男1 おい、おっさん。脇から出てきて横取りはなしだぜ。そいつは、俺達が先に見つけたんだ。

白衣の人1 もちろん、君達にはそれ相当のお礼をさせてもらうよ。ほら、お礼だ。とつときな。

白衣の人達、何かを投げてよこす。

男1 “フェリックスくんガム”だ。

白衣の人1 そう。しかも、当たりのやつ。

男1 うわ、本当だ、当たりだ。すげえなあ。

白衣の人2 さあ、犬を渡してもらおう。

男1 ふざけるな。子供じゃないんだから、こんなものじゃ誤魔化されないぞ。

白衣の人2 不足かい、それじゃ？

僕 僕たち、この犬を飼うことに決めたんだ。

人面犬 飼う？この際だ、何だっついていいや。ワンワン、キャインキャイン。

女1 お手。

人面犬 (お手をする) シッシッシッシッシ。

女1 ほら、もうこんなに仲良しよ。

白衣の人3 本当に？パパやママは、うちで飼ってもいいって言ったの？

女1 え？うちはもう猫が一匹いるから……。

男1 うちもアパートだから、生き物はちよつと……。

僕 家も……。

白衣の人3 それごらん。

白衣の人4 さあ。いい子だから、おとなしく犬を渡しなさい。

女1 ダメよ。私知ってるもん、捕まった犬がどうなるのか。

僕 そうだ。この犬、空き地で飼おう。空き地の土管の陰にダンボールを置いて、そこで

飼うんだ。エサは毎日交代で、みんなの家から持つてくることにしよう。もちろん、毎日

交代で散歩にだつて連れて行く。

白衣の人4 よせよせ。子供つてやつは、いつもそうだ。移り気なのさ。今は夢中でも、三日

もすればもう忘れるくせに。

女1 そんなことないもん。

白衣の人5 やめとけ。その犬は人を咬むぞ。

人面犬 そんなことしないよ。友達だもん。

白衣の人5 だったら、その手は何だ！

人面犬 え？

人面犬、後ろから女1の首に手を回している。

白衣の人1 少女の首に回したその手で、お前は一体何を掴もうとしていたんだ。

人面犬 ほつといてくれ。拙者のことは、もうほつといてくれ。

白衣の人2 捕らえろ！

人面犬に殺到する白衣の人達。それを巧みにかわし、逃げようとする人面犬。

白衣の人3 逃がすな！

白衣の人、ポケットから何やら白くて細長いものを取り出すと、それをポイと宙に放る。

かつん。それが濁いた音をたてて地面に落ちると、人面犬はきびすを返してもどつて来る。

人面犬 骨だ。

白衣の人4 畜生の悲しさってやつだな。

白衣の人5 拾えよ。そして確かめてみる。それがオリジナルなのか、複製なのか。

人面犬はそれを拾い上げると、この世のものとは思えないような悲しい声で暗く。

人面犬 ワアオーン！

白衣の人1 そうだ。おまえが殺した少女の骨だ。

白衣の人2 おまえが殺した少女の骨だ。

白衣の人3 おまえが殺した少女の骨だ。

白衣の人4 おまえが殺した少女の骨だ。

白衣の人5 おまえが殺した少女の骨だ。

人面犬 …夜だ。カラッポの夜が来る。こんな夜はたまらない。黒い虚無の森の中で、私は

ゆっくりと解体されていった。その森で私はカワユクテカワイソウナモノに出会ったんだ
っけ。たまらないよ。たまらなくなつて蒼い月に向かって吠えたんだ。そうだ、骨を埋め
に行かなくちや。埋めたなら、すぐに掘り返そう。掘り返したと思つたなら、すぐまた埋
めるんだ。そしたらまた掘り返して、そしたら、そしたら…、絶対そうするんだ、絶対、
そうするんだつたら！

白衣の人1 連れて行け！

ワアオーン。遠くで近くで、ひとときわ激しく犬共が吠える。

白衣の人2 なんだ？今日はやけに犬が騒ぐ日だ。

僕 誰か来る。

女1 え？

僕 ほら。犬の遠吠えにまじつてタッタタッタと駆け足の音が聞こえないかい？

男1 何にも聞こえないぞ。

僕 ほら。遠吠えが、だんだんこちらに近づいてくる。犬の遠吠えをエールに誰かが夜の
街を疾走してここに向かって来るんだ。

なるほど遠吠えは確かにだんだんこちらに近づいてくる。

それにつれ、タッタタッタと駆け足の音も聞こえてくる（ような気がする）。

僕 来た！

夜の街を疾走して男が駆け込んでくる。

男 なんばしよつとね！

男、すごい格好をしている。

白衣の人3 何だ、あの妙なコスプレ野郎は？

白衣の人4 近くでコミケでもやってるのか。

白衣の人5 何者だ、名を名乗れ！

男 悪党に名乗る名などは持つちよらんけど、ばってん冥土のみやげに教えてやるばい。物悲しい屋台のチャルメラに誘われて犬が遠吠えを上げるころ、夜のインバネスを跳ね上げて、君の闇夜を終わらせに来る。努力と友情と勝利の人。九州よりの使者、人呼んで九州男児マンでござす！

ポーズ、ビシッと決まる。

白衣の人達 九州男児マンだあ？

男1 お前、さっきの酔っ払いのおやじだろ。

九マン 何を言うちよるか。人違いたい。おいどんは九州男児マンでござす。

男1 うそお。

九マン 悪党め。無抵抗の犬ばよってたかってイジメるとは言語道断ばい。さあ、そん犬は放してやり。

白衣の人1 そうはいかん。これは仕事だ。

九マン うぬ、それが仕事とぬかすつとね。ひよつとして、おはんらプロね。悪事ばやってメシ食うちよるとね。そんならもう容赦はせんばい。九州に代わってこのおいどんが、お仕置きしちくるる。

白衣の人1 やれるもんならやってみやがれ。ものども、仕事の邪魔をさせるな。

白衣の人達 イーッ。

九マン 覚悟すつとね。

白衣の人1 先手必勝だ。かかれ！

白衣の人達 イーッ！

九マン しえからしか！

デパートの屋上で催される仮面ライダーショーのような戦闘が繰り広げられる。

はじめは優勢な九州男児マンだが、だんだんと数に押され始める。

とうとう追い詰められる。

九マン ちえすとお！

辛くも危機を脱する九州男児マン。

九マン なかなかやるでござすな。ならば奥の手たい。きさんらに、生きながら地獄を見しちくるる。

白衣の人達 イーッ。

九マン 必殺！ 別府温泉地獄巡りビームー・

白衣の人達 イーッ

九マン たつぷり地獄を楽しむたい。別府はなかなかによかところごわすど。
白衣の人達 イーッ。

何故か楽しげな断末魔の叫びを上げて、白衣の人達退場。

人面犬 いぢめる？

九マン ……。

僕 いぢめないよ、その人は、君を助けてくれたんだ。

九マン それは悪意ゆえの行為ばい。それも、とびつきりな。

僕 え？

九州男児マン、人面犬にツカツカと歩み寄ると彼の手から骨をもぎ取る。

人西犬 何するんだ！返せたら！

九マン こげな骨が、そんなに大事でごわすか？…だったら、ほれ！

九州男児マン、骨を遠くに放り投げる。

人面犬 あ！

九マン 拾いに行くたい。犬ならば、赤くて長い舌を出しヨダレを垂らしながら走ってゆ

け。ワアオーンとひと声鳴いて、さあ、拾いに往くばい！

人面犬 ワアオーン！

僕 待って、オタク…。

人面犬 うるせえな。ほっといてくれよ。

人面犬、最後にひと声哀しそうに啼く。しかし本当に哀しいのかどうかは、犬ではない僕達には分からない。そして人面犬は去ってゆく。

女1 哀しそうな声ね。

九マン 哀しそう？ おはんに犬の気持ちの何がわかるとね。

僕 あ。

投げたはずの骨は、実は九州男児マンの手の中にあつた。

九州男児マンが軽くそれを握り締めると、あっさりと骨は一握りの砂へと変じる(努力目標)。

僕 なぜだ？

九マン 意味はない。ただの悪意ばい。これであいつの求める骨は永遠に失われたとよ。それでもアイツは骨を探して街を彷徨うんやろね。いつかアイツは、自分が四つ足で走って

いることに気付くんばい。そうこうしているうちにアイツは、とうとう本物の犬になりよる。だが、終わらん。それでも終わらん。やがて犬のその身も朽ち果てて、アイツは一つの声になる。ただの、渴いた遠吠えになる。遠吠えになって街を巡るんたい。だから、少年よ！

僕・男1・女1 はい！ （九州男児マンの気迫におされ大きな声で返事をしてしまう）

九マン 何もするな！

僕・男1・女1 はあ？

九マン 何もせんでええから、耳を澄ましてあの遠吠えを聞け。

僕・男1・女1 ……？

九マン 街をうろつく野犬の半分は、もとは人間だったとね。

ワアオーン。遠吠えが上がる。

九マン む、何処かでおいどんを呼ぶ声がするばい。行かなくては。それでは皆さん、おさらばたい。

九州男児マン、退場。

入れ替わりに誰かが泣きながら走ってくる。

男2 うえーん。どこ行ってたんだよお。心細かったよお。会いたかったよお。

男1 探した？

男2 何だよ、それ。みんなと別れてから、道に迷うは日が暮れて暗くなるは皆はなかなか見つからないはで、もう大変だったんだからな。

男1 わかったよ。わかったから、もう泣くな。みっともないぞ。

男2 どこ行ってたんだよ？

男1 いや、それが実は……。

僕 行こう。

男2 ん？

僕 行こう。脳病院までは、もうあとちよつとだ。

男1 ああ。

男2 ちよつと、待ってよ。

暗転。

出前持ちに単サス。

出前持ち　ハーメルンは夜の早い街であった。夕方、夜の気配が漂い始めるころ、人々は何かに怯えるように家に引き籠もると重い鎧戸をおろした。あの街は、夜を拒絶する。ハーメルンの街で日が暮れてからも営業しているのは、他所者の店、私達の来々軒だけであった。日が暮れたら、客なんて一人も来やしない。それでも親方は、夜は店を閉めようなどとはけつして言わなかった。夕方、店が暇になると、私は親方に店を任して街へドンブリをさげにゆく。ハーメルンの夕方は、ちよつとした見物だ。夕飯時、各家の台所から立ち昇る馬鈴薯の湯気が、街をスッポリと包み込む。ドイツ人の食卓にゆでた馬鈴薯は欠かせないのだ。街中にドンブリくさい白い霧が立ち込め、一寸先も見えなくなる。見えない街を、お得意先を一軒一軒まわりドンブリをさげてくる。岡持ち片手に私は自転車走らせた。……その年、ハーメルンは飢饉であった。そのせいか街を覆う馬鈴薯の湯気は、いつの年にもまして深く濃かった。どうやらあの日、一寸先も見えない白い霧の中で、私は何かを失くしてしまったようだ。そしてそれが何なのかを、私は忘れてしまった。ただそれ違つた奇妙な一団のことだけは、ハッキリと覚えている。たいそう美しい男であった。その男を先頭に、後ろには百三十人子供の行列が続く。その中には私の見知つた顔もあつたが、何処か声をかけるのははばかられた。何処からか、泣きたくなるような笛の調べが聞こえてきた。あの男が吹いているのに違いない。私は振りかへつてみたい衝動にかられたが、どうしても出来なかつた。かわりに持つていた岡持ちを放り出すと、盲滅法自転車を走らせた。……どうやって店に辿り着いたのかは、よく覚えていない。確かに私は、あの霧の中で何かを失くしてしまったようだ。失つたものが何であるのかさえ、私には判らないが。いや、たぶん私は、それが何であるかは知っているのだ。ただ、未だにそれを何と呼べばいいのか、私には判らない。

舞台は真つ白になる。出前持ち、白のなかに溶けるように消える。

ポツンと一つ、岡持ちが残された。

霧の中からマントの男がスーツと現れる。男はマントを翻し、岡持ちに腰掛ける。

僕、男1、男2、女1、登場。

マントの男、子供たちの気配を察すると、霧の中に溶けるように消える。

男2　　すげえ霧だな。何にも見えやしない。

男1　　番号！一。

男2　　二。

僕　　三。

謎の声　四。

女1 五。あれ？

僕 どうした？

女1 …ううん、何でもない。

男1 よし、全員いるな。みんな、何があっても手だけは離すなよ。この霧だ。誰かはぐれでもしたら、大事だぞ。

一同、ソロソロと霧の中を進む。

グキュルキュルと腹の鳴る音。

男1 なんだ、今の音は？

謎の声 俺の腹の音だ。

男2 そういえば、腹減ったなあ。

僕 せつかく忘れていたのに。イヤなこと思い出させるなよな。

謎の声 スマン。

男の足が岡持ちに触れる。

男1 ああ！

僕 何だよ。気持ちの悪い声出すなよ。あー、びっくりした。

男1 足になにか触った。

男2 それって危ない物じゃない？いきなり火を吹いたりとかしない？

男1 わからん。ちよつと待て。

男1、恐る恐る岡持ちを撫でまわし、それから思い切って顔を近づける。

男1 岡持ちだ。

男2 なんだ。

僕 何故こんな所に岡持ちが？

マントの男 この霧だからね。新米の出前持ちが、道を誤って転んだりしたのかな。

男1 出前の途中で？

マントの男 さあ。でも、ひよつとしたら食い物にありつけるかも。

男2 あ、そうか。

僕 なか覗いてみるよ。

女1 ちよつと。よしなさいよ、拾い食いなんて。お腹こわすわよ。

男1 あったぞ。

女1 本当？

男1、岡持ちからドンブリを取り出す。

女1 ラーメン、カツ丼、それとも…。
男1 一応ラーメンだ。
男2 一応って？
男1 一つのラーメンだ、これ。ドンブリの中で麺が千からびてるよ。ん？ かすかに豚骨の匂いがするよ。僕そんなもの食えるかよ。

グキユルキユル。お腹の音。

女1 なんだから、さつきよりずっとお腹が空いた気がするね。
男2 うん。
男1 まだ何かあるぞ、ほら。
僕 何だ？
男1 チョコレートだ！
男2 チョコレート。
男1 こいつは食べそうだな。
僕 やった。ツイてるな、僕達。
女1 あんた達、それ本当に食べる気？
男1 イヤなら食うなよ。でも、俺は食べるぞ。
僕 も。
男2 うん、食べる食べる。ちょうだい。
男1 待てよ。まず、そこに座れ。

一同、岡持ちを真ん中に丸くなって座る。

女1 …ちよつとちょうだい。
男2 けつきよく食べるんじゃないか。
男1 ええと、何人いるんだっけ？番号。一。
男2 二。
僕 三。
女1 四。あれ？
男1 四人か。
女1 うそ、一人足りないわ。五人よ。
男2 え？
女1 さつき点呼取ったときは、五人いたじゃない。
僕 四人だったよ。夢でも見たんじゃない。
女1 だって…。
男1 よし、きつちり四等分だ。ほれ。
男2 サンキュー。ほい。
僕 ありがとう。はい。

僕と委員長の間に、いつの間にかマントの男が座っている。

マントの男 ありがとう。

女1 ……ねえ、私の分は？

僕 何言ってるんだ。渡したろ。

女1 私は、もらってないわよ。

男2 転校生。

僕 へ？

男2 汚えぞ、お前。一人で二個食っただろ、チョコレート。

僕 食べてないよ。

男2 嘘つけ。

僕 知らないって。たしかに渡したよ。

男2 じゃあ何で一個足りないんだよ。

マントの男 僕が頂きました。

男2 ホレ見る。やっぱりな。

僕 ちよつと待て。今のは、僕じゃない。

男2 え？、

僕 誰だ？今、僕って言ったのは？

シーン

男1 転校生、冗談は止せ。怒るぞ。

僕 冗談じゃない。

男1 番号！一。

男2 二。

僕 三。

マントの男 四。

女1 ……五。

一同 五人いる！

女1 やっぱり一人多い。

男2 誰だ？何処にいる？姿を見せろ。

男1 みんな、落ち着け。そんな奴、何処にもいやしないよ。

マントの男 私は、ここだ。

男1 え？

女1 キャー！

僕 委員長！

マントの男 ハハハハハ。

僕 委員長がさらわれた。

男1 助ける！

マントの男、指をパチンと鳴らす。

男1 あたた…（突然その場にうづくまる）。

僕 どうした？

男1 急に腹が…。

男2 いてて…、俺もだ。

僕 どうしちまつたんだ、みんな。いたた…。

男1 転校生、お前もか。

マントの男 バカめ。拾い食いなんて下品な真似をするからだ。

男1 あのチョコレートか。

マントの男 うちの劇団は品行方正で通ってるんだ。教育的効果を考える。ご来場のお子様
が、真似して拾い食いたらどうする。よい子のみんなは真似しちやダメだよ。

男2 だからって、チョコレートに毒を盛るなんて。

マントの男 注意書きをよく読まんからだ。銀紙の裏を見る。

男1 本当だ。なにか書いてある。「毒入りキケン食べたら死ぬで怪人…」

僕 貴様、怪人二十面相！

男2 別名、キツネ目の男か。

マントの男 違う。最後までよく読め。

男1 怪人…、怪人赤マント？

赤マント その通り！

僕・男1・男2 誰だ？そりゃ。

赤マント ちッ。最近の坊ちゃんお嬢ちゃんは、ご存知ないか。怪人赤マントの恐怖の伝説
を。少々時代遅れになってしまったようだが、まだまだ若い者には負けん。現役バリバリ
の人さらいよ。

僕 委員長をどうする気だ？

赤マント さあて、どうするかな。軽く香港にでも売り飛ばしてみるか。

男1 え、香港に行けるの？

僕 いいなあ、それ。おじさん、僕もついでにさらっておくれよ。

赤マント バカ。お前ら香港だぞ、香港。香港はな、怖いんだぞー。

男2 おっさん、悪いけど、今時の子供に香港に売り飛ばすって言ってもイマいちリアリテ
イーないよ。

赤マント そうか。

男2 今だったら、やっぱり北朝鮮あたりが狙い目なんじゃない。

赤マント 時代の流れってやつか。昔の子供は、香港って聞いただけで小便ちびったもんだ
よ。

男2 ロートルには辛い時代だね。

赤マント 老兵は死せず。ただ消え去るのみ、か（遠い目をする）。

男1 いまだ、委員長！

委員長、赤マントの手にガブリと噛みつく。

赤マント 痛！

たまらず手を離す赤マント。その隙について委員長、辛くも逃れる。

男1 逃げる！

赤マント クソガキめ、逃がさんぞー

僕、男1、男2、女1、退場。それを追って赤マントも退場。

僕、男1、男2、女1、飛び込んでくる。

男1 番号！一。

男2 二。

僕 三。

女1 四？

男1 よし、全員いるな。いいか、みんな。何があっても手だけは離すな。

霧の中ボオツと人影が浮かぶ。

人さらい1 お嬢ちゃん、お嬢ちゃん。

女1 え？

入さらい1 お嬢ちゃん、お嬢ちゃん。

女1 誰か何か言った？

男1 いいや。

男2 何にも。

人さらい1 お嬢ちゃん、こっちこっち。

女1 誰？

人さらい1 誰でもいいさ。そんなことよりお嬢ちゃん。御三家の中じゃ誰が好きだい？

女1 だんぜん野口五郎よ。五郎、シビレちゃう。

人さらい1 そう。マニアックな子だね。

女1 五郎がどうしたの？

人さらい1 家に野口五郎のサインがあるんだけど、よかつたらお嬢ちゃんにあげようか。

女1 本当？うれしい。

人さらい1 おまけに西城秀樹と郷ひろみのサインもあげよう。

女1 ありがとう。

人さらい1 おじさんの家は、このすぐ近くなんだけど。いっしょに来れる？

女1 うん。行く行く。

人さらい1 それじゃあ行こうか。おいで。

女1、握っていた手を離すと人さらい1と一緒に霧の中に溶けるように消える。

僕 あ、委員長。
男2 どうした？
僕 委員長とはぐれちゃった。
男1 バカ。あれだけ手を離すなって言ったのに。
僕 だって…。
男1 おーい、委員長。どこだ？返事しろ。
僕 …委員長、返事しろ。

ボオツつと人影が浮かぶ。

人さらい2 坊や、坊や。
男2 誰だ？
人さらい2 坊や。こっち、こっちだ。
男2 俺のこと呼んだ？
人さらい2 ああ。
男2 何の用？
人さらい2 君、車好きかい？
男2 うん。大好き。
人さらい2 もしよかったら、おじさんのスーパーカーでドライブしないかい？
男2 本当？…おじさんの乗ってる車は？
人さらい2 スーパーカーだよ。
男2 車種だよ、車種。カウンタックとかフェラーリとかポルシェとか。
人さらい2 …スーパーカーさ。
男2 それじゃ分かんない。
人さらい2 嫌ならいいよ。他の子を誘うから。
男2 待って。行くよ、行きます。
人さらい2 じゃあ行こう。おじさんの車は、あっちの方にとめてあるんだ。
男2 うん。
男1 あ、バカ、よせ。
僕 おい、どこ行くんだ。

男2、手を振りほどくと人さらい2と一緒に霧の中に消える。

男1 おーい、戻って来い。
僕 おーい。
男1 どうしちまったんだ、あいつ。
僕 わかんないよ。

人影が現れる。

人さらい3 坊主、坊主。

男1 ん？

人さらい3 坊主、ひさしぶり。

男1 誰だ？おっさん。

人さらい3 おや、ひどいな。叔父さんの顔、忘れちゃったのかい？

男1 叔父さん？

人さらい3 神戸の叔父さんだよ。ま、無理もないか。君とは、君がまだこーんなに小さい頃、お祖母さん家で会ったきりだもんね。

男1 あの、ごめんなさい。

人さらい3 いいんだよ。それより坊主、野球は好きか？

男1 はい。大好きです。

人さらい3 家に王選手のサイン入りホームランボールがあるんだけど、欲しくないかい？

男1 くれるんですか？

人さらい3 ああ、あげるとも。どうだい、久しぶりに叔父さん家に遊びに来ないか？

男1 行きます行きます。

人さらい3 夜になったらナイターを見に行こう。チケットがあるんだ。巨人阪神戦だぜ。

男1 はい。

僕 おい、どこ行くんだ？

男1 はなせ。

人さらい3 何してるんだ、行くぞ。

男1 神戸の叔父さんが呼んでるんだ。

僕 え？

男1 はなせったら。叔父さん、待って。

僕 訳の判らないこと言うな。

男1 待って下さい、叔父さん。

男1、僕の手を振りほどくと人さらい3と一緒に霧の中に消える。

僕 どこにいるんだよ、そんな人。

シーン。

僕 おーい。どこ行っちゃったんだよ、皆。おーい、返事しろ。おーい！

シーン。

霧の中ボオツツと人影が浮かぶ。怪人赤マントである。

赤マント 坊や、坊や。

僕 誰だ、委員長か？

赤マント 坊や、坊や。

僕 何処だ、何処にいる。

赤マント こっち、こっちだよ。坊や。

僕 あ。誰だ？あんた。

赤マント 君のお父さんの友人だ。

僕 父さんの？

赤マント 君のお父さんに頼まれて、君を迎えに来たんだ。

僕 何かあったんですか？

赤マント 君のお父さんが仕事中にひどい事故に巻き込まれてね。たいへんなケガを負って病院に収容された。

僕 ! 本当ですか？

赤マント ああ。

僕 で、父さんの、父さんのケガの具合は？

赤マント とりあえず命は取り留めたが、いぜん意識不明の重体だ。

僕 え？でも、さつき父さんに頼まれたって…。

赤マント え、あ、それはだな。つまり、容態が不安定で一定せんのだよ。ときたま意識不明の重体で、ときたま元気になる。かと思えば、突然エイズになったりガンにもなったりする。わからん男だね、君のお父さんも。

僕 はあ。

赤マント さあ、急ごう。詳しい話は、病院に着いてからだ。

僕 でも…。

赤マント 君のご家族も、みんな病院に向かわれた。残るは、君だけだ。

僕 はい。

赤マント あっちに私の車が止めてあるんだ。行こう。

どこからともなく切なくて泣きたくなるようなチャルメラの音が聞こえてくる。

不思議な調べに乗って、男を先頭に男1、男2、女1、登場。

男は一見、ラーメン屋のおやじ風。右手にチャルメラ、左手に岡持ちを持って肩から水筒を下げている。

男 まいど、来々軒でござす。

僕 みんな！どこ行ってたんだよ？

男1 いや、それが、

男2 不思議なチャルメラの音に誘われて、

女1 気が付いたら私達、このおじさんの後についてフラフラ歩いてたの。

男 坊主、見知らぬおじさんに声ばかりかけられてん簡単について行ってはいけません。もしかししたら、そいつは怖い怖い人らしい。

僕 あ、はい。

赤マント チクショウ、もう一押しだったのに。何しに来やがった。

男 もちろん、ご注文のラーメンを出前に。

赤マント うちはラーメンの出前なんて頼んだ覚えはない。お隣の間違いじゃないか？

男 そげな筈はごわんせん。お宅、アドルフさんでござんんど？

赤マント はあ？

男 ありや、カスパールさんじゃったかのお。まさか、ハンナちゅうことはなかるう。ハンナは女ばい。

赤マント 全部ハズレだ。私はアドルフでもカスパールでも、ましてやハンナでもない。とんだ人違いだ。

男 うぬ。上手いこと言つて、あんた代金踏み倒す気ばい。そうはいかんたい。

赤マント うちは…、うちは田中だ。

男 ほら、やっぱりお宅で間違いなかとよ。

赤マント え？

男 はるばるハーメルンからラーメン出前に来たとよ。代金貰うまでは帰れんばい。

赤マント ハーメルン。

男 そう、ハーメルンたい。

赤マント そりやあ遠くからご苦労なこつたな。ラーメン、のびちゃったんじやない？

男 いらん心配でござす。うちのラーメンは、そげなヤワな腰はしちよらん。ほい、田中さん。ラーメン一丁お待ち。

赤マント あ。

赤マント、思わずドンブリを受け取ってしまう。

男 毎度どうも。しめて三百五十ドイツマルクになります。

赤マント 何だ、このラーメンは。ドンブリの中で麵が干からびてるじゃないか。ん？かすかに豚骨の匂いがある。

男 ありやりや、いつの間に。

赤マント いつのラーメンだ、これ？

男 ついさつき。ざっと七百年前つてとこか。

赤マント 七百年？

男 その分勉強させてもらうつとよ。

赤マント ふざけるな。そんなラーメンに誰が金を払うか。

男 やっぱり。ハナっから踏み倒すつもりだったんでござすな。

赤マント 何言つてんだ。帰れ帰れ。だいたい、うちはラーメンの出前なんて頼んだ覚えな
いよ。

男 よか。そんなら、おいどんにも考えがあるでござす。

赤マント ほれ、ドンブリ持つてとつと帰れ。

男 ちえすとお！

男、持っていたチャルメラを吹き鳴らす。

僕 あ。

子供達、登場。

音楽。

赤マントを中心にして、輪になって踊りだす子供達。

男 踊れ！子供達。

赤マント 何だ？どうしたことだ、これは？

男 金のかわりたい。子供は貰ってゆくとね。

赤マント 何だって？

男 後悔したばい？じゃつどん、もう遅い。

赤マント 貴様！何者だ？

男 おんしも人さらいの端くれなら、一九八四年、ヨハネとパウロの日、ハーメルンで起こった出来事は知つちよろう？

赤マント まさか、あんたがああ有名なハーメルンの…。

男 そうとも、ハーメルンのチャルメラ男たい！

赤マント はあ？

男 踊れ踊れ、もつと踊れ！

赤マント ちくしょう、同業者だったのか。

男 同業者？ナンパと人さらいの区別もつかんような奴に、そげんこつ言われたくなか。

赤マント みんな、知らない人について行っちゃダメじゃないか。パパやママに、そう教わらなかつた？

僕 今のパパとママは、本当のパパとママじゃないんだ。

赤マント え？

男1 僕等は橋の下で拾われた。捨て子だったんだ。

男2 パパやママも捨て子さ。

女1 たった今、私達が捨てたから。

僕 みーんな捨て子さ。

赤マント 聞け。あのおじさんはね、怖い怖い人さらいなんだ。

男1 知ってるよ。僕らが呼んだんだ。

男2 おじさん。出前、ご苦労様。

男 ああ。

女1 おじさん、水筒は？

男 ここたい。

僕 干からびたラーメンに、お湯を注いでおくれ。

男 ホイきた。お安い御用ばい。

男、ドンブリに水筒からお湯を注ぎ、フタをする。

男1 干からびきつた麺が、お湯を吸ってふやける頃。

男2 ドンブリの中が白い湯気で一杯になったら。

女1 フタを開け、立ち昇る湯気と一緒に僕らも消えてなくなろう。

僕 おじさん、まだ？

男 慌てるな。三分間、ジッと我慢の子たい。

男1 おじさん、立ち昇る湯気は、七百年ぶんのタメ息かい？

男2 干からびた麺よ、その身に蓄えた時間を吐き出せ。

女1 ドンブリの中で、時間よ、ふやける。

僕 おじさん、まだ？

男 まだでござす。

男1 おじさん、まだ？

男 もうチョイ。

男2 おじさん、まだ？

男 ええい、欠食児童め。黙って合図のチャルメラを待て。

赤マント 君達。

女1 おじさん、止めても無駄よ。

僕 時は来れり。

男、ドンブリに水筒からお湯を注ぎ、フタをする。

男1 チャルメラの音を合図に。

男2 カルワリオ山を越えて。

女1 立ち昇る湯気と一緒に消えてなくなろう。

赤マント 待てよ！

男 ……3、2、1、ジャスト三分。

男、チャルメラを吹き鳴らし、ドンブリのフタを取る。

僕 合図だ。

舞台、白くなる。

男 はい、ラーメン一丁お待ち。

赤マント あ。

男、赤マントにドンブリを押しつける。

男 子供達よ、行進だ！

不思議な調べに乗って、男を先頭に行進する子供達。

赤マント 待て！ちくしょう、湯気で前が見えねえ。どこへ行った？待てよ、おい！

赤マント、一人ぼつんと取り残される。

赤マント 気が付くとコドモはもはやそこにはいなりただコドモの残り香だけがあるのみだ。

赤マント、ズズツとラーメンをすすする。

赤マント あきらめな。コドモは既にさらわれた。後の祭だ。そう、私達に出来るのは、後に残って祭りを続けることだけだ。景気よくやろうじゃないか、最後の祭りを。……そうだ、私は夢見ていた。毎日毎日コドモをさらいながら、いつかそのコドモにさらわれる日。一緒に連れていって欲しかったなあ、私も。何処へだつて？それは、コドモである私が死んだ後にしよう。コドモの私は、あそこを語る言葉を持たない。語らずとも、そこは自明の所だ。だけどいつか、もはや言葉を持つてしか子供と対峙できなくなったその時こそ私はコドモとコドモが目指した地平について語ろう。その日まで、私は内なるコドモに始末をつけ、コドモの帰りを待っていよう。それが立派な大人の努めつてもんだ。そうだろ？…（ふと気付いた様に）コドモは帰って来れるんだろうか？帰ってこなければ、滅びるだけの話さ。祭りの途中で。

赤マント、ドンブリを置いて登場。

出前持ち、登場。

出前持ち まいど、来々軒です。ドンブリをさげにまいりました。

出前持ち、後ろに気配を感じる。

出前持ち 君達。

男1 アッ。

出前持ち 何か用？なんで僕の後を尾けるの。

男1 あ、いや、その…。

男2 こいつが尾けようって言ったんです。

男1 バカ。裏切り者。

出前持ち なに？何の用？

男1 いや、出前持ちなら街の番地に明るいし、病院の場所も知ってるんじゃないかって言

ったのは、こいつです。

出前持ち　ん？

僕　え、僕？でも、ひよつとしたら、これから病院に出前に行くところかもって言ったの

は、彼女です。

出前持ち　ん？

女1　ちよつと待つてよ。とりあえず尾けてみようって言ったのは、あんたでしょ。

出前持ち　けつきよく君達は、僕に何が聞きたいんだ。ん？

男1　……脳病院をご存知ないですか？坂の途中に建ってるらしいんですけど。

出前持ち　ああ、あの病院ね。知ってるよ、よく出前に行くもん。

僕　知ってるんですか？どこです、場所は。教えてください。

出前持ち　ほれ、そこ。

僕　え？

出前持ち　そこだよ、そこ。

僕　え？

出前持ち　そこが脳病院だ。

ふりむけば、いつの間にか脳病院がドオーンと建っている。

僕　あ！

男1　いつの間に。

男2　なんで気がつかなかったんだろう。

出前持ち、退場。

男3　がいる。

男3　遅かったじゃないか。

男1　あ。お前、来てたのか。

男3　待ちくたびれちゃったよ、ホントに。俺一人で見に行こうかと思ってた所だ。

男2　それがさ、いろいろと大変だったんだよ。

男3　大変って、何が？

男1　ま、その話は後だ。ここなんだろう？転校生。

僕　ああ。

男2　いよいよ問題の水洗便所を拝めるって訳だ。

僕　目ん玉ひん剥いて、よっく見ろよ。父さんは、嘘つきなんかじゃない。

男3　まだ判んねえよ。

僕　すぐ判るさ。ついて来い。

暗転。

〈第十一場〉

暗闇の中、イヤな音をたててドアが開く。隙間からもれる光。僕、男1、男2、男3、女1、それぞれ別のドアから登場。

男1 どうだった？

僕 ダメだ。行き止まりだ。

男2 こっちも。

男3 右に同じ。委員長は？

女1 同じよ。

男2 何なんだ、この病院は。どこまで行ってもドアばっかり。

男3 便所はどこだ、便所は。

ギギイーと軋みながら、ドアが三つ開く。ドアの向こうにチラリと白い便器が見える。

僕 あ。

男1 そこか！

ドアに殺到する一同。

突然、便器からニュツと手が出てくる。手は、それぞれ赤いトイレトペーパー、青いトイレトペーパー、黄色いトイレトペーパーを持っている。

声1 赤い紙やろかー？

声2 青い紙やろかー？

声3 黄色い紙やろかー？

一同 うわあ！

驚く一同。あわててドアを閉める。

男1 今の、見たか？

僕 ああ。

男2 手、出たよな？

女1 何なのよ、あれは。

男3 みんな見たんなら、錯覚じゃないよな。

男1、ツバをひとつ飲みこむと、

男1 よし。もう一度確かめてみよう。

恐る恐るドアを開ける。

声 赤い紙やるか？青い紙やるか？黄色い紙やるか？
全員 やっぱりいる！

中からドアをガンガン叩いている。必死でドアを押さえる。
声も聞こえてくる。「赤い紙やるか？青い紙やるか？黄色い紙やるか？」

僕 どうしよう？水洗便所は目の前なのに。

男2 どうしようって言われても。

男3 どうしよう？

男1 ええい、この際だ。くれるもんなら貰っちゃおう。

女1 大丈夫？

男1 他に何かいい考えあるか？おい！くれるもんなら貰うぞ！

ドアを叩く音、ぴたりと止む。声も聞こえなくなる。

僕 どれにする？全部か？

男1 いや。こういう話にはたいていオチがあつてな。赤い紙って答えた奴は、ナイフで刺され、血で真っ赤に染まって死ぬ。青い紙って答えた奴は、全身の血を抜かれて真っ青になつて死ぬ。黄色の紙って答えた奴だけが助かるんだ。

僕 よっしゃ、黄色い紙だな。おい！黄色い紙を貰うぞ！

僕、ドアを開けると、恐る恐る黄色いトイレトペーパーに手を伸ばす。

僕の手がトイレトペーパーをつかんだ瞬間、便器から突き出た手が僕の手首をひつつかむ。

僕 うわあ！

僕、慌てて近くにいた男2の手を引つつかむ。

男2 あ！

男2は、男3をつかむ。

男3 お！

男3は、女1をつかむ。

女1 キヤ！

声 黄色い紙と答えたあなた。あなたは、あたり一面黄色の世界、狂気の国へご案内。

僕 何だって？

男2 話が違うぞ。

男3 くそ。

女1 助けて。

女1、男1に手を伸ばす。が男1、その手を無視して、

男1 あきらめな。行ってこい、狂気の国へ。

一同 え？

ピーポーピーポー、救急車のサイレンの音が近づいてくる。

男1 そら、黄色い救急車のお出迎えだ。

僕 どうしちゃったんだ？

女1 何してるの。早く、手を貸して。

男2 おい。

男3 おい！

男1、水洗のレバーを廻す仕草。

一同 うわあ！

ジャー！水音とともに舞台は真っ黄色になる。抵抗も空しく、僕達は便器に消える。

男1 ようこそ！ 狂気の国へ！

ボーンボーン。どこかで柱時計が鳴っている。

男1 時間だ。院長先生の回診の時間だ。

男1、退場。

入れ替わりに婦長、登場。

医者1 院長先生の、おなーりー！

太鼓が打ち鳴らされる。

医者たち　　したーにー、したーに。したーにー、したーに。したーに、……。

ゾロゾロとヒョつ子の医者達を引き連れ、大名行列さながらに院長先生、登場。院長の顔、どこかで見たと思つたら柳田である。

柳田　　皆さん、おツムの御加減、いかがですか？

柳田、ドアをノックしてまわる。

コンコン。

女1の声　　入っています。

コンコン。

男2の声　　入っています。

コンコン。

男3の声　　入っています。

柳田　　おやおや、皆さん。どうなさったんです？今夜はまたとない夜だ。一緒に素敵なお丑三つ時を楽しもうじゃありませんか。

柳田、再びドアをノックしてまわる。

コンコン。

男2　　入っています。

コンコン。

女1　　入っています。

コンコン。

男3　　入っています。

柳田　　月がこんなに青いのには？

医者1　　名医の誉れ高い院長先生直々のご回診だ。君等も早く退院して家に帰りたいですよ。うんこなんてうっちゃって、院長先生に診てもらいなさい。

柳田　　医者1、

医者1 はつ。
柳田 世辞はいい。

コンコンコン。柳田、みたびノック。

男2・3・女1 入ってます。

医者1 まだ言うか。

医者2 おい、引きずり出せ。

柳田 待て。突っ走るな、若さよ。早いと嫌われちゃうぞ。それが、この病に特徴的な症状なのだ。カルテを見たまえ。

柳田、カルテを渡す。カルテを覗き込む医者たち。

医者たち ……？

柳田 どうした？声に出して読んでみる。

医者3 読めません。

柳田 お前ら、それでも医者か。ドイツ語も読めんのか。

医者4 ドイツ語？それ以前の問題です。そもそも字ですか、これは。

柳田 何だっけ言うんだ。

医者5 人類が文字を獲得する以前の、なにやらモヤモヤとした魂の叫びに見受けられます。

柳田 うるさい。私がドイツ語って言ったらドイツ語なんだ。

医者たち まさしくドイツ語だ。

医者1 病名は？何と書いてあるんですか？

柳田 便秘。

医者たち 便秘？

柳田 ドイツ語で言えば、糞つまりだ。

医者2 院長先生、それは横町の薬屋さんの仕事です。我々の管轄じゃない。

柳田 これだからヒヨっ子は。いいか、このクランケ達がつまらせたのは、ここだよ。

柳田、自分のおつむをコツコツと叩く。

医者3 脳ですか？

医者4 脳となったら、我々の出番です。

医者5 しかし院長、そんな便秘聞いたこともありません。

柳田 見たまえ。これが今朝、べつのクランケから摘出したうんこだ。

医者1 味噌のように見えますが。

柳田 一見味噌だが、

柳田、人差し指で味噌をすくうと、ペロツと舐める。

医者たち あ！うんこを舐めた。

柳田 味も味噌だ。ちよつとしよっぱいな。ミカワ屋さんによく言っておこう。

医者2 味噌もクソもいっしょか。

柳田 その味噌、もといクソでクランケの脳は圧迫され非常に危険な状態であります。一刻も早い処置が必要です。

医者3 味噌でねえ。

柳田 味噌ではない、クソだ。トラウマという、ぶつというんこだ。

医者4 トラウマか。

医者5 心理的外傷ですね。それなら判ります。

医者1 院長、このようなケースの場合、もつとも適切な処置は？

柳田 クランケには、すでにミルメークを投与済みだ。そろそろ効果が表れる頃です。ご観察ください。

医者たち ミルメーク！

柳田 覚えておきなさい。ミルメーク、あれは効くよお。

プピッ、プポ、ブチュッ…と、イヤーな音が聞こえてくる。

柳田 始まった。

医者1 (耳を押さえながら) 嫌な音ですね。

柳田 君はそれでも医者か。

医者2 オペで血を見るのには慣れましたが、あの音だけはちよつと…。

柳田 いいぞ。溜まりに溜まったトラウマを、残らず吐き出しちまえ。

嫌な音、唐突に止む。

柳田、ドアをノックしてまわる。

コンコン。

男2 入っています。

コンコン。

女1 入っています。

コンコン

男3 入っています。

柳田 さあ、流すに流せぬトラウマうんこを流して、そこから出て行きましょう。

男2 出れるのか？ここを。

柳田 はい。その巨大なトラウマを、流すことさえ出来れば。

男2・3・女1 ……。

柳田 さあ。

男2・3・女1 ……。

柳田 さあ、流そう。

男2 ……流します、

男3 流すとき、

女1 流せば、

柳田 流せ！流したら流れる。流れる流れる、みんな流れていっちなまえ！

ジャー。

柳田 諸君、成功だ。患者は救われた。

……サー…、微かに水の流れる音が聞こえてくる。

柳田 ん？何だ、この音は。

その音が頂点に達したとき、ザッパーン！便器より谷底ライオン、登場。

医者3 あ。

谷底ライオン、辺りを見回し、しばし熟慮のうえ弱々しく吼える。

谷底 ガオー、ガオー、ガオー。

医者4 なんだ、お前は？

谷底 俺、ダメっスよ。

医者4 え？

谷底 勘弁してくださいよ。俺、ダメっスよ。

柳田 トラウマだ。あんまりデカくて流れきれなかったか。

谷底 失礼な。百獣の王を、なんで虎や馬と間違えるんスか。オイラは谷底ライオンっス。

百獣の王、ライオンっスよ。ガオー

医者5 院長、このようなケースの場合の処置は？

柳田 知るか。勤続二十五年、ベテランの私にも、この事態は読めなかった。

谷底 皆の物！ひかえるっス。王様の謁見っス！

柳田 王？…流され王か！

医者1 流され王？

柳田 いつの頃からか、入院患者の間で語られ始めた奇妙なウワサだ。

医者2 ウワサ？

柳田 夜を統べる男の伝説だ！

ザッパーン。

全員　　でた！

便器の中から、トイレットペーパーを頭に戴いた男がゆっくりと顔を出す。

医者3　　汚水が逆流を始めた。

医者4　　院長、すぐそこまで水が。

医者5　　うんこが、こっちに流れてきた！

全員　　うわあ！きつたねえ！

全員、あわてて一步後退。

柳田　　ニッキバリヤー！

全員　　ニッキバリヤー！

捨て台詞を残し、退場。

王　　地下を流れる不潔の奔流、異臭漂う約束の地、下水道より我を呼びせしは何者ぞ？

ドアが開き、口裂け女、人面犬、怪人赤マント、登場。

人面犬　　王の御前に。

主　　何が望みじゃ？

口裂け　　王の望みこそ、我等が望み。

王　　はて？ 余に望みなんぞあったかのお。

赤マント　　我が君！

王　　ん？

赤マント　　あな情けなや、口押しや。

口裂け　　それが、我が君のお言葉か。

人面犬　　かつての夢は、希望は、溢れる野心と雄々しい覇気は。すべては長き流謫の旅のすえに置き去りか。

王　　黙れ！無礼者！

谷底　　それでこそ我等の王っス。

全員　　さあ、王よ。つぎは何して遊ぶ？

王　　そんなこと言われてもなあ？たいていの遊びは、もうずっと前にやつちやったよ。

赤マント　　花いちもんめ。

王　　いいね、それ。

人面犬　　陣取り。

王　　陣取りに決まり。

谷底 鬼ごっこ。

王 それ、最高。

口裂け おままごと。

王 やっぱり、おままごとだよね。

全員 流され王。

王 何だよ。

谷底王 様は、人の意見に流されすぎるっス

王 うるさい。余は昔から決断ごとが苦手なんだ。文句があるなら、お前が王様やれ。

谷底 めっそもないっス。

王 わかったよ。今夜は、おままごとをやるう。

谷底 おままごとっスね。

赤マント 何回目のおままごとだ？

人面犬 七万九千八百九十五回目。

口裂け なんて長い夜なのかしら。

王 やつと決まったな。

口裂け あたし、お母さんの役。

谷底 オイラは次男の役がいいっス。

赤マント それじゃあ俺、長男。

人面犬 俺は？

赤マント 犬はどうだ？

人面犬 えー、また拙者が犬の役？…もう犬はやダよ。オタク、たまにはライオンの役やら

ない？

赤マント バカ。普通の家庭でライオンなんて飼ってると思うか？

人面犬 父さんの役は？誰がやるの？

王 余だ。余が父の役をやる。

谷底ライオン、サツと緊張する。

谷底 王様、誰か来るっス。

流され王、便器のなかに消える。他の連中トイレに駆け込み、慌ててドアを閉める。

僕、登場。

僕の後ろで音もなくドアが開くと、足が一本、ボテツと転がり出てくる。

僕、物音に驚き振り返ると、勢い余って足を思いつきり踏んづけてしまう。

声 イテえ！何しよんのか！

僕 あ！手の次は、足か！

パジャマを着た男、登場。

全員 久しぶり。元気だった？

僕 ああ。本当に久しぶりだね。もうどのくらいたつだろう？君らと逢わなくなっただら。

口裂け ねえ、遊ぼう。

人面犬 遊ぼう。

赤マント 遊ぼうよ。

僕 君等とは、ついに一回も遊べなかったね。どこで遊んでいようと、僕らは君達目を感じてたんだよ。いつも物陰からジッとこちらを見ていたね。いつ物陰から飛び出して、遊ぼうって言いながらこっちに走ってくるのかなって、僕等はドキドキしてたんだ。

全員 遊ぼう。

僕 いいよ。なにして遊ぶ？

口裂け カン蹴りやろう。

僕 いいけど、空きカンは？

人面犬 これ。

僕 トイレットペーパーじゃないか。

赤マント 王冠だよ。

僕 トイレットペーパーが？

口裂け 王冠よ。カンには違いないわ。

僕 鬼は？

人面犬 最初は君だよ。

僕 いいよ。

赤マント かくれる。

妖怪たち、いなくなる。

僕 山本さん、みつけ。

口裂け あ。

僕 新聞委員会だった僕たちは、二人で学級新聞を作りましたね。その後、芸能界入りしてセントフォーの一員になったというところでもないウワサを聞きました。本当ですか？
口裂け 見つかっちゃった。

口裂け女、スゴスゴとトイレに消える。

僕 大津くん、みつけ。

人面犬 う。

僕 大津くんはマンガが好きで、とても絵が上手かった。あなたが描いてくれた宇宙戦艦ヤマトの絵に、僕はホレボレしました。

人面犬 ちくしょう。もうちよっとだったのに。

人面犬、退場。

僕 はな水こと細水くん、みつけ。
赤マント く。

僕 君の家はラーメン屋をやってましたね。いつか君の家でラーメンをご馳走になりました。このあいだ帰省した折、たまたま君の家の近くを通りました。ラーメン屋はすでになく、お好み焼き屋になっていました。その後いかがお過ごしですか？

赤マント あーあ。

赤マント、退場。

僕 どうした、もうおしまいか？

流され王、便器より登場。

僕 父さん、みつけ。

王 ……ああ。とうとう見つかったね。

僕 今度は父さんの番だ。

王 何が？

僕 父さん、鬼だ。

王 父さんは鬼か。

僕 カン蹴りの話さ。

王 ああ。判ってるとも。

僕 父さん。

王 ん？

僕 今晩は父さんがいないから、晩ゴハンはハンバーグだ。

王 ああ。

僕 母さんは、父さんのいない夜にはきまってハンバーグを作る。なぜなの？

王 父さん、ハンバーグ嫌いなのを母さんは知ってるんだ。

僕 だからね、僕は時々、父さんが家に帰ってこなければいいのになと思うんだ。こんな僕は、いけない子でしょうか。

王 お前の好きなものは、いつだって父さんを傷つけるんだ。オトウサンハヤスメ。

僕 何それ？

王 オはお年玉のオ。

僕 トは？

王 トリケラトプス。

僕 ウは？

王 運動会だ

僕 サンは？

王 サンタクローズ。

僕 ハは？

王 言わずと知れたハンバーグ。

僕 ヤは？

王 三角ベースの野球。

僕 スは？

王 なんでも買えるスーパーマーケット。

僕 メは？

王 メリーゴーランド。みんなみんな、お前の愛してやまないものたちだ。

僕 そんなことないよ。僕は父さんが、いっとう好きだ。

王 やめろ！お前、水に流す気だな！

僕 え？

王 よせ！やめろ！頼むから、父さんのこと許さないでくれ！

僕 父さん。

王 生きたまま流すなんて、あんまりじゃないか！せめて、せめて、お前の手で父さんを殺しておくれ。

僕 父さん！

谷底ライオン、登場。手には便所ブラシを持っている。

谷底 王様、ダメっスよ。

王 谷底ライオン。

谷底 王様は、誰よりもカッコ悪くなくちゃダメなんス。王様は、誰よりも無様でなくちゃダメなんス。王様は、誰よりも情けなくなきやダメなんス。王様は、誰よりもヘッポコでなくちゃダメなんス。王様は、誰よりも弱くなくちゃダメなんス。王様は、誰よりも…
…。

王 何故だ？…理由を聞かせろ。

谷底 王様、せめて見事なまでにカッコ悪く流されてくれっス。そして流れ着いた先に、月のない夜を用意してくれっス。はてしない夜っス、そんな夜が、誰にだって必要なんス。

王 何故だ？

谷底 理由はひとつっス。オイラは、そんな王様の方が好きなんス。王様一人を行かせはしないっス。オイラも、すぐ後を追うっス。だから！

王 余は死ぬことさえもままならぬか。

谷底 御意。

下水道課の職員たち登場。

谷底 無様っス。

王 ライオンよ、余は情けないか？…

谷底 情けないっス。

王 ライオンよ、余はヘッポコか？

谷底 ヘッポコっス。

王 ライオンよ、余は弱いかな？

谷底 弱いっス

王 みんな、余を笑うだろうか？

谷底 誰が笑っても、オイラだけは笑わないっス。

王 そうかならば、行こうか。我こそは流され王。およその世の役に立たぬ者、嘲笑され、疎んじられ、排除されし輩よ。来たりて我に従いやがれ。我は、お前らの傍らに、はてしのない夜を用意する者なり！

僕 父さん。

王 やれ！

ジャー！

谷底 王様、カッコ悪いっスよ！

僕 父さーん！

谷底ライオン、鬣をとると男1になる。

男1 柳田さん、終わりました。

柳田、登場。

柳田 ご苦労さん。帰って休んでくれ。

男1 はい。

僕 ランロー・たつやくん、みつけ。

帰りかけた男1の足、とまる。

僕 君の金色の髪が、僕は好きでした。ライオンのようだと思います。でも君には父さんがいないというウワサで、お母さんと二人暮らしだというウワサで、じっさい君は時々ひどく乱暴になりました。元気でした？

下水道課の職員たち、退場。

柳田 ♪命短し♪恋せよ乙女♪……。

唄は「ゴンドラの唄」

僕 ……なあ、あん時、あんた、どげな夢見よったんかい。

柳田 それが、君のトラウマかい？

僕 誰だ？

柳田 私だよ。

僕 ああ、市の下水道課の人。

柳田 ずいぶんと昔、私は市の下水道課に勤める公務員でした。ある時は教師で、ついさつきは精神科の医者でした。そのどれもが私ではなく、同時に、全部が私なんです。誰でもないって事は、つまり誰でもあるって事です亡

僕 訳が判らないよ。

柳田 なに、そんな堅苦しい話をやろうって訳じゃないんだ。ただの昔話だ。楽にして聞いてくれ。むかし昔……。

僕 昔話の押し売りか。

柳田 黙って聞け。むかし昔ある所に、仕事をしない役人の男がおりました。男は別に怠け者ではなかったのですが、男の勤める役所では仕事をやり過ぎるとクビになるのです。ある日、体の不調を感じた男は、仕事を休んで病院に行くことにしました。その病院で男は、恐ろしい事実を知り愕然としたのです。

僕 どこかで聞いた話だな。

柳田 その男、癌だったんです。

僕 やっぱり。

柳田 男は自分の命が、もつてあと三ヶ月だと知りました。そして男は知ったのです。自分が今まで死んでいたことを。その日から、男は変わりました。男は生きる決心をしたんです。

僕 それから？

柳田 市の下水道課に勤める男は、自分の街に水洗便所をつくる決心をしました。さまざまな困難、妨害にも屈せず、男はついにやり遂げました。そして男は、ある雪の降る晩に自分の手でつくった水洗便所に跨ると、「ゴンドラの唄」を歌いながら満足そうに死んでいったとき。どんとはれ。

僕 あんた、癌で死ぬのかい？

柳田 とんでもない。信じたのか？今の話。

僕 だと思った。

柳田 昔話は、昼にやっちゃいけないんだ。だから私は、夜まで待ったんだ。

僕 夜？もう夜なのか。

柳田 さあ、君の話を聞かせてくれないか。

僕 あんたもしつこいねも

柳田 話には、話を返す。当然だろ。

僕 しょうがないな。

柳田 そこに水洗便所はあったのかい？

僕 あったさ。

柳田 嘘。

僕 信じたのか？

柳田 いや……。

僕 そうだ；カン蹴りやりながら話そう。僕が鬼だ。

柳田 え？

僕　　鬼は昔、モノといった。つまり、物語とは鬼語り。眉に唾して聞いてくれ。なにしろ、鬼の話だもの。

柳田　ああ。

暗転

〈第十一場〉

男、登場。有刺鉄線の前でフト立ち止まる。

男 果てしのない夜は、いつも有刺鉄線の向こう側、あの空き地の方からやって来る。

男は、「流され王」と呼ばれていた男に良く似ている。しかし、別人かもしれない。

男 夜を歩いているとたまに、ドキッ！とするような空き地に出くわす時がある。油断しちゃいけない。いつもの路は知らん顔をして、そつとその身に迷宮を隠しているんだ。夜の曲がり角を曲がる度に此処がどこだか分からなくなる。そうして十三番目の曲がり角を曲がると、突然空き地は目の前に目眩のように現れる。ドキッ！としたらこんどはゾォッ！とする。……風が、吹いてくる。生暖かい風が…。

有刺鉄線の向こう側、濃い闇の中からビュッ、ビュッと風を切る音が聞こえてくる。

男 何やってるの？

男1 見れば判るだろ、素振りだよ素振り。谷を這い上がれなかったライオンの末裔は、せめて金属バットで素振りでもして、せいぜい親をビビらせるしかすることがない。

男 お父さんは、驚いたかい？

男1 ああ。あわくって逃げちまったよ。おじさんは？

男 おじさんも逃げるところさ。

僕、歩いてくる。顔をそむけ足早に行こうとする。

僕 ……父さん？

男 お若えの、人違いだよ。

僕 だって……、

男1 あ！みんな、来てみろよ。

僕 え？

男2、男3、女1、登場。

一同 流され王だ！

男 行っちゃまいな。行って、愛する者に流されてやれ。でき得る限り、カッコ悪く。お前もまた流され王だ。

僕 僕が？

男1 ウワサは本当だったんだ。

男2 どうする？

男 3 呪文を唱えろ。
女 1 戴冠式の準備よ。

王の戴冠式、厳かに行われる。

男 1 王を讃えよ。

男 2 お前は糞便である。

男 3 お前はゴミの山だ。

女 1 お前は俺たちを殺すためにきた。

全員 お前は俺たちを救うためにきた。

僕 流れよう、命の限りに。

〈終わり〉